
深 谷 市

社前／八日市Ⅱ

自転車歩行者道整備工事（県道深谷妻沼線）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 7

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

社前・八日市遺跡の紹介

両遺跡は、高崎線深谷駅の北東約2 kmにあり、^{にれやま}楡山神社付近を境に東西に隣接する遺跡です。楡山神社は、平安時代の『^{えんぎしき}延喜式』にも登載されている古社で、旧^{むさしのくに は ら ぐん そうちんじゅ}武蔵国幡羅郡の総鎮守として知られています。

今回は、^{ふかやめぬません}県道深谷妻沼線の拡幅工事に伴う調査で、楡山神社の北側に沿った細長い調査区を発掘したところ、僅か500㎡と狭い面積ながら奈良・平安時代（8世紀後半～9世紀）の竪穴住居跡7軒をはじめとする遺構が発見され、当時の生活の一端を垣間見ることができました。また、遺構は見つかりませんでした。また、遺構は見つかりませんが、弥生時代の中でも古い時期の土器が出土し、周辺の弥生遺跡との関連が注目されています。

序

埼玉県では、「人と自然にやさしい道づくり」を基本理念とし、「時間が読める道づくり」と「安心と活力の道づくり」を目標に道路整備を進めてまいりました。また、その具体的な整備方針の一つである「安心・安全な道路空間の形成」のためには、誰もが安心して通行できる道路の整備とともに、日常生活における利便性の向上が大切な課題であります。

県道深谷妻沼線は、深谷上杉氏の居城として知られる深谷城脇を起点とし、市内中心部と妻沼町（現熊谷市）を結ぶ重要な道路です。安心・安全を念頭においた整備を進めるなかで今回、自転車歩行車道整備の一環として拡幅工事が実施されることとなりました。

その事業地内に所在する社前・八日市遺跡の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路環境課の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡や溝跡・土壙などの遺構とともに、弥生時代中期初頭にまで遡る遺物が発見されるなど、狭い範囲ながら大きな成果を上げることができました。

本書は、これら発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路環境課、熊谷県土整備事務所、熊谷市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成19年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 刈部 博

例言

1. 本書は、深谷市に所在する社前遺跡及び八日市遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
 - 社前遺跡（YSRME）
埼玉県深谷市原郷336-1 番地他
平成14年3月6日付け 教文第2-121号
 - 八日市遺跡（YUKIT）
埼玉県深谷市原郷337-1 番地他
平成14年3月6日付け 教文第2-120号
3. 発掘調査は、県道深谷妻沼線整備事業に伴う記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、埼玉県県土整備部道路環境課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。また、整理報告書作成事業も当事業団が実施した。
4. 各事業の委託業務名は、下記のとおりである。
 - 発掘調査事業
「県道深谷妻沼線（深谷市地内）埋蔵文化財発掘調査委託」
 - 整理報告書作成事業
「自転車歩行者道整備工事（埋蔵文化財発掘調査（整理）業務委託）」
5. 本事業は、I-3の組織により実施した。
 - 発掘調査は、平成14年2月1日から3月22日まで橋本 勉・木戸春夫が担当して実施した。
 - また、整理報告書の作成は、平成19年6月1日から7月31日まで宮井英一が担当して実施し、平成19年9月30日に事業団報告書第345集として印刷・刊行した。
6. 各遺跡のこれまでの調査履歴（主体者・文献）は、以下のとおりである。
 - 社前遺跡
平成6年度：深谷市（青木 1995）
平成7年度：深谷市（青木 1996）
 - 八日市遺跡
平成5年度：当事業団（中山 1995）
平成12年度：深谷市（知久 2003）
7. 発掘調査における基準点測量は株式会社東京航業研究所に委託した。
8. 発掘調査における写真撮影は橋本・木戸が行い、出土品の写真撮影は宮井が行った。
9. 出土品の整理・図版作成は宮井が行い、山北美穂の協力を得た。
10. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、IIを山北、IVの遺物を赤熊浩一と磯崎 一、Vを磯崎が行い、他は宮井が行った。
11. 本書の編集は、宮井が行った。
12. 本書に掲載した資料は、平成19年8月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
13. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の機関・方々から御教示を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。
深谷市教育委員会 小池晋禄 青木克尚 知久裕昭 楡山神社（柳瀬宮司）

凡例

1. 本書におけるX・Yの数値は、日本測地系（旧測地系）による国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を示す。

今回の調査でベンチマークとしたCL-14グリッド北西杭の座標は、X=22470.000m、Y=-47740.000m（北緯36°12′04″9246、東経139°18′08″5856）で、杭上の標高は34.289mである。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本（1グリッド）としている。

3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向に数字（1・2・3…）、西から東方向にアルファベット（A・B・C…）を付し、両者を組み合わせて呼称した。

但し、今回のグリッド名称については、平成5年度に調査された八日市遺跡で設定されたグリッド名称をそのまま使用・延長し、調査区北西隅を基準に、CB-10からCJ-14グリッドを設定した。

4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S J…竪穴住居跡

S D…溝跡

S K…土壙

P…ピット（小穴・柱穴）

5. 本書の遺物観察表に使用した記号は以下のとおりである。

胎土密度

①緻密 ②普通 ③粗い

胎土組成

A 石英 B長石 C 雲母 D 角閃石

E 片岩 F 白色針状物質 G 赤色粒子

H 白色粒子 I 黒色粒子 J 礫

焼成状況

1 硬質 2 普通 3 軟質

6. 本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、一部例外もある。縮率は、個々の図面内に記す。

全測図 1/400

遺構図 1/60

土器実測図 1/4

石器実測図・拓本 1/3

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。

8. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/25,000及び深谷市都市計画図1/2,500である。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	2. 溝跡	19
1. 発掘調査に至る経過	1	3. 土壌	19
2. 発掘調査、報告書作成の経過	2	4. ピット	25
3. 発掘調査、報告書作成の組織	2	5. グリッド出土遺物	25
II 遺跡の立地と環境	3	V 調査のまとめ	27
III 遺跡の概要	7		
IV 遺構と遺物	11	写真図版	
1. 住居跡	11		

挿図目次

第1図 埼玉の地形	3	第12図 第3号住居跡掘り方	17
第2図 周辺の遺跡	4	第13図 第6号住居跡	17
第3図 遺跡調査範囲	8	第14図 第5号住居跡	18
第4図 基本層序	8	第15図 第5号住居跡掘り方	19
第5図 遺跡位置図	9	第16図 第1号溝跡	20
第6図 調査区全体図	10	第17図 土壌	21
第7図 第1号住居跡	11	第18図 ピット	23
第8図 第2号住居跡	12	第19図 土壌・ピット他出土遺物	24
第9図 第3・4・7号住居跡	13	第20図 グリッド出土遺物	26
第10図 第3号住居跡遺物分布図	15	第21図 弥生時代遺跡分布図	28
第11図 第3号住居跡出土遺物	16		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表 ……………	5	第3表 出土遺物観察表 ……………	24
第2表 ピット計測表……………	23		

写 真 図 版 目 次

図版 1	1	調査区全景（遺構確認状況）	図版 7	1	第1号住居跡出土遺物（第7図1）
	2	調査区全景（完掘状況）		2	第1号住居跡出土遺物（第7図2）
図版 2	1	第1号住居跡遺物出土状況		3	第1号住居跡出土遺物（第7図3）
	2	第2号住居跡完掘状況		4	第1号住居跡出土遺物（第7図4）
図版 3	1	第3号住居跡遺物出土状況		5	第1号住居跡出土遺物（第7図5）
	2	第5号住居跡完掘状況		6	第3号住居跡出土遺物（第11図3）
図版 4	1	第3～7号住居跡完掘状況		7	第3号住居跡出土遺物（第11図4）
	2	第3～7号住居跡掘り方		8	第3号住居跡出土遺物（第11図7）
図版 5	1	第1号住居跡カマド遺物出土状況	図版 8	1	第3号住居跡出土遺物（第11図9）
	2	第1号住居跡ピット遺物出土状況		2	坏底部の墨書（第11図9・赤外線撮影）
	3	第3～7号住居跡遺物出土状況		3	第6号住居跡出土遺物（第13図1）
	4	第3号住居跡カマド遺物出土状況		4	第11号土壙出土遺物（第19図3）
	5	第3号住居跡カマド完掘状況		5	第11号土壙出土遺物（第19図4）
	6	第6号住居跡カマド検出状況		6	第5号ピット出土遺物（第19図5）
図版 6	1	第6号住居跡カマド完掘状況		7	グリッド出土遺物（第20図32）
	2	第1号溝跡完掘状況		8	グリッド出土遺物（第20図32・底面）
	3	第1号土壙完掘状況		9	グリッド出土遺物（第20図33）
	4	第2号土壙完掘状況	図版 9	1	グリッド出土遺物（第20図1～18）
	5	第3号土壙完掘状況		2	グリッド出土遺物（第20図19～31）
	6	基本土層（第4図）			

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では基本目標「安心・安全な暮らしを確保する」の施策として「交通安全の推進と安全な道路交通環境の整備」を推進している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策に伴う文化財の保護については、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県道深谷妻沼線緊急右折レーン設置事業にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成12年11月22日付け道環第634号で、道路環境課長より文化財保護課長（当時）あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成12年11月22日付け教文第985号で八日市遺跡、社前遺跡について「現状保存することが望ましいが、やむを得ず工事を実施する場合は記録保存のための発掘調査を実施すること」と回答し、協議を実施した。しかし、工事計画の変更が困難であったため発掘調査を実施することと

なり、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとなった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が熊谷土木事務所長（当時）から平成14年2月14日付け熊土第1486号で提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成14年3月20日付け教文第3-1039号で行った。また、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知番号は次のとおりである。

八日市遺跡

平成14年3月6日付け 教文第2-120号

社前遺跡

平成14年3月6日付け 教文第2-121号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

社前・八日市遺跡の発掘調査は、県道深谷妻沼線の拡幅工事に伴うもので、平成14年2月1日から平成14年3月22日まで実施した。調査面積は500㎡である。

2月上旬から事務手続き等の準備を開始し、同月25日から順次囲柵工事・事務所設置工事等を実施した。また、並行して重機による表土除去作業を行った。

3月4日から、遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業を実施した。なお、グリッドの配置及び名称については、平成5年度に調査された八日市遺跡第1次調査に準じることとし、調査区北西隅を基準に、CB-10からCJ-14グリッドを設定した。

表土除去終了後、3月1日から人力による遺構確認作業を行ったところ、調査区の中央付近を中心に竪穴住居跡・溝跡・土壙・ピット等の遺構が検出されたため、直ちに遺構の精査を開始し、順次土層断面図・平面図等の作成及び写真撮影等の

記録作業を行った。

遺構の調査終了後、調査区の埋め戻し、事務所の撤去及び事務手続き等を行いすべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

社前・八日市遺跡の整理作業は、平成19年6月1日から平成19年7月31日まで実施した。

6月1日から出土品の水洗・注記を行い、続いて接合・復元作業に移った。

遺構図に関しては、各種図面の整合性をとった上で作成した第二原図をデジタル化し、コンピュータ上でトレース作業を行った。

土器・石器等の遺物に関しては、接合・復元作業の後、拓本・実測作業を行い、続いてトレース・写真撮影を行った。

7月中旬から図面・写真・本文の割付作業と原稿執筆を進め、下旬には印刷業者を選定して入稿した。校正は3回行い、平成19年9月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成13年度（発掘調査）

理事長	中野 健一	調査部	
常務理事兼管理部長	大館 健	調査部長	高橋 一夫
管理部		調査部副部長	坂野 和信
管理幹	持田 紀男	専門調査員（調査第一担当）	村田 健二
		統括調査員	橋本 勉
		統括調査員	木戸 春夫

平成19年度（報告書作成）

理事長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本 洋一	調査部長	村田 健二
総務部		調査部副部長	磯崎 一
総務部副部長	昼間 孝志	整理第一課長	宮井 英一
総務課長	松盛 孝		

られる。市内には西島・大塚島・内ヶ島・矢島・
血洗島^{ちあらいしま}・伊勢島・高島といった島の付く地名が多
いが、それは利根川の氾濫によりできた自然堤防
の高台を意味し、八島（多くの島の意）と称され
てその地名の由来となったといわれている。

(3) 楡山神社

楡山神社は平安時代（10世紀）にまとめられた
『延喜式神名帳』に登載され、旧武蔵国幡羅郡の
総鎮守とされている。社名の由来ともなった楡の
木は、樹齢600～1000年と推定され、現在埼玉県
の文化財（天然記念物）に指定されている。

2. 歴史的環境

(1) 旧石器～縄文時代

社前・八日市遺跡周辺に旧石器～縄文前期の遺
跡は確認されていないが、幡羅遺跡^{はら} (36) ではソ
フトローム上面からナイフ形石器が出土してい

る。また、^{ひがしがたじょう}東方城跡 (19) より縄文章創期^{あけどひがし}と考
えられる尖頭器が1点出土し、^{こだい}小台遺跡 (39) から
早・前期の土器片が少量出土している。遺構に伴
わないものの、遺物が出土する状況からみると、
今後この時期の遺跡が発見される可能性もあると
考えられる。

中期から中期後半になると遺跡は増大し、その
多くは台地に分布している。小台遺跡、根岸遺跡
(20)、城西遺跡 (4) などからこの時期の遺構が検
出されている。

後・晩期に入ると桜ヶ丘組石遺跡 (38)、^{あけどひがし}明戸東
遺跡 (15)、^{じょうしきめんきた}新屋敷東遺跡 (13)、^{こだい}上敷免北遺跡 (11)
などから数多くの遺構が検出されており、この時
期の遺跡分布は台地部分や低地部分を含めた広範
囲に及んでいる。

(2) 弥生時代

弥生時代前期・中期初頭では上敷免遺跡 (10)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	市町村	遺跡名	時代								
			旧石	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
1	深谷	八日市		○	○	○	○				
2	深谷	社前			○		○				
3	深谷	疋鼻和						○			
4	深谷	城西					○				
5	深谷	皿沼城跡							○		
6	深谷	戸森前				○	○				
7	深谷	戸森松原					○				
8	深谷	森下					○				
9	深谷	上敷免森下			○	○					
10	深谷	上敷免		○	○	○	○	○			
11	深谷	上敷免北		○		○	○	○	○		
12	深谷	本郷前東				○	○				
13	深谷	新屋敷東		○		○	○				
14	深谷	新田裏					○				
15	深谷	明戸東		○		○					
16	深谷	宮ヶ谷戸			○	○	○				
17	深谷	原		○		○	○				
18	深谷	東川端				○	○				
19	深谷	東方城跡							○		
20	深谷	根岸		○		○	○				
21	深谷	深谷城跡								○	
22	深谷	備前堀端							○	○	
23	深谷	諏訪台		○			○	○			
24	深谷	ウツギ内						○	○		
25	深谷	砂田						○	○		
26	深谷	柳町						○	○		
27	深谷	城北		○			○	○			
28	深谷	居立						○	○	○	○
29	深谷	前						○	○	○	○
30	深谷	清水上							○		
31	熊谷	根絡						○	○		
32	熊谷	横間栗						○	○	○	
33	熊谷	西別府館跡								○	
34	熊谷	西別府祭祀遺跡								○	
35	熊谷	西別府廃寺跡								○	
36	深谷	幡羅遺跡						○	○		
37	深谷	下郷								○	
38	深谷	桜ヶ丘組石						○	○	○	
39	深谷	小台						○	○	○	
40	深谷	木の本古墳群								○	

から東海系の土器群や大量の無文土器が、さらに埼玉県では初の遠賀川式おんががわの土器片が出土している。遺構に伴わないものの、この時期の優良な資料として報告されている。

中期に入ると再葬墓や住居跡が上敷免遺跡で検出され、宮ヶ谷戸遺跡(16)、横間栗遺跡(32)よこまくり(熊谷市)からもほぼ同時期の再葬墓が確認されている。中期前半までは上敷免遺跡周辺一帯に集落が形成されていたが、中期後半から後期にかけて減少していく。後期の遺構が宮ヶ谷戸遺跡、清水上遺跡(30)、明戸東遺跡で確認されており、集落は上敷免遺跡より東側に移行していったと考えられる。

(3) 古墳時代

古墳時代前期に入ると遺跡はやや増加傾向になるものの極端な変化は見られない。宮ヶ谷戸遺跡、明戸東遺跡、清水上遺跡、根絡遺跡ねがらみ(31)(熊谷市)など台地の縁辺付近に集落が集中している。その集落域よりやや西方にある上敷免遺跡や東川端遺跡(18)ではほぼ同時期の方形周溝墓が多数確認されており、当時この一帯は墓域化されていたと考えられる。

中期後半・後期に入ると遺跡が爆発的に増加する。妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれ、八日市遺跡(1)を含む上敷免遺跡周辺もそのひとつに数えられている。また、この時期に小規模な円墳が数多く作られていて、その代表的なものに櫛引台地の先端部に形成される木の本古墳群がある。社前遺跡(2)も木の本古墳群に包括されており、深谷市教育委員会の調査で円墳が3基検出されている。しかし後世に墳丘を削平されており全容は不明である。

終末段階(7世紀初頭)になるとこれまでの大集落は縮小傾向になっていく。

(4) 奈良～平安時代

7世紀後半段階では、幡羅遺跡(36)から倉庫群が検出され、幡羅郡衙正倉の可能性が指摘されている。また、幡羅遺跡から直線距離にして約7.8

kmの場所に榛沢郡衙正倉跡はんざわと推定される中宿遺跡(旧岡部町)が確認されており、両郡衙は比較的近い距離に位置していたと言えよう。なお、幡羅遺跡の成立とほぼ同時期に、宮ヶ谷戸遺跡、東川端遺跡、下郷遺跡(37)など官衙域周辺に位置する遺跡で住居数の増加が確認されており、その関連が指摘されている。また新屋敷東遺跡では大型倉庫跡が検出されており、正倉別院の可能性も考えられている。

9世紀以降になると集落は分散化する傾向になり、小規模な集落が広範囲で数多く形成される。しかし、10世紀にはいると低地の自然堤防上に形成された集落の多くは再び減少していく。

10世紀の中頃になると幡羅遺跡の正倉域に竪穴住居が建築されていたことが確認されており、郡衙の崩壊に伴って正倉としての機能を失い集落化していったと考えられる。

(4) 中世

平安時代末期あたりから在地名を名乗る武蔵武士が出現し始める。深谷一帯は武蔵七党である猪俣党の人見氏、内島氏、荏原氏、蓮沼氏、横瀬氏の根拠地であり、諸氏の館跡が確認されている。

14世紀後半には関東管領上杉憲顕のりあきの子で、深谷上杉の祖である憲英のりふさが足利氏討伐をねらう新田氏を鎮圧し、その後も反撃の機会を窺う新田氏を監視、抑制するため庁鼻和城こばなわ(3)を築城している。その後、四代房憲ふさのりは古河公方足利氏との交戦に備え、康正2(1456)年に深谷城を築城し、庁鼻和城から移ったとされている。

15世紀後半に入ってから深谷上杉氏は家臣との内乱や、北条氏、武田氏、越後上杉氏らとの交戦を繰り返し、やがて北条氏に属した。天正18(1590)年に豊臣秀吉によって北条氏が滅ぼされると、氏憲は所領召し放しとなり、約200年にわたる上杉氏の深谷地域支配は幕を閉じた。

Ⅲ 遺跡の概要

社前・八日市の両遺跡は、深谷市原郷に所在する。

両遺跡の載る櫛挽台地は、寄居付近を扇頂とし、松久丘陵と鉢形段丘の間から北東に大きく広がる扇状地性の台地で、遺跡はまさにその北縁端に位置している。すぐ北側には数mの比高差をもって福川が東流し、その更に北側には、約4km先の利根川に向かって緩やかに妻沼低地が広がっている。

現在、深谷市（合併以前の旧深谷市域）に所在する遺跡は266遺跡を数えるが、勿論その分布は台地上だけではない。近年、国道17号深谷バイパスや上武道路などの建設に伴う調査で大規模な集落遺跡が発見されており、低地部にも古利根川の形成による自然堤防上には数多くの遺跡が存在することがわかってきた。

さて、社前・八日市の両遺跡は、延喜式内社として知られる楡山神社付近を境に、ほぼ東西に隣接する遺跡である。

東側の社前遺跡は、縄文～平安時代の複合遺跡で、その遺跡範囲に重なるように木の本古墳群（古墳時代後期）が分布する。既に深谷市による2回の調査が行われており、3基の古墳跡が報告されている（青木1995・1996）。

一方、八日市遺跡も縄文～平安時代を中心とする遺跡で、台地縁辺部と低地部を含む一帯が遺跡範囲となっている。これも当事業団及び深谷市による調査が行われているが、何れも低地部に残された自然堤防上の調査で、古墳時代後期を中心とする集落跡が検出されている（中山1995・知久2003）。

両遺跡の調査の契機となった県道深谷妻沼線は、深谷市の市街地から台地上を北上し、楡山神社付近から低地部に移り、そのまま本庄妻沼線と合流して旧妻沼町（現熊谷市）へ向かう県道である。今回、その拡幅工事に伴って試掘調査を実施

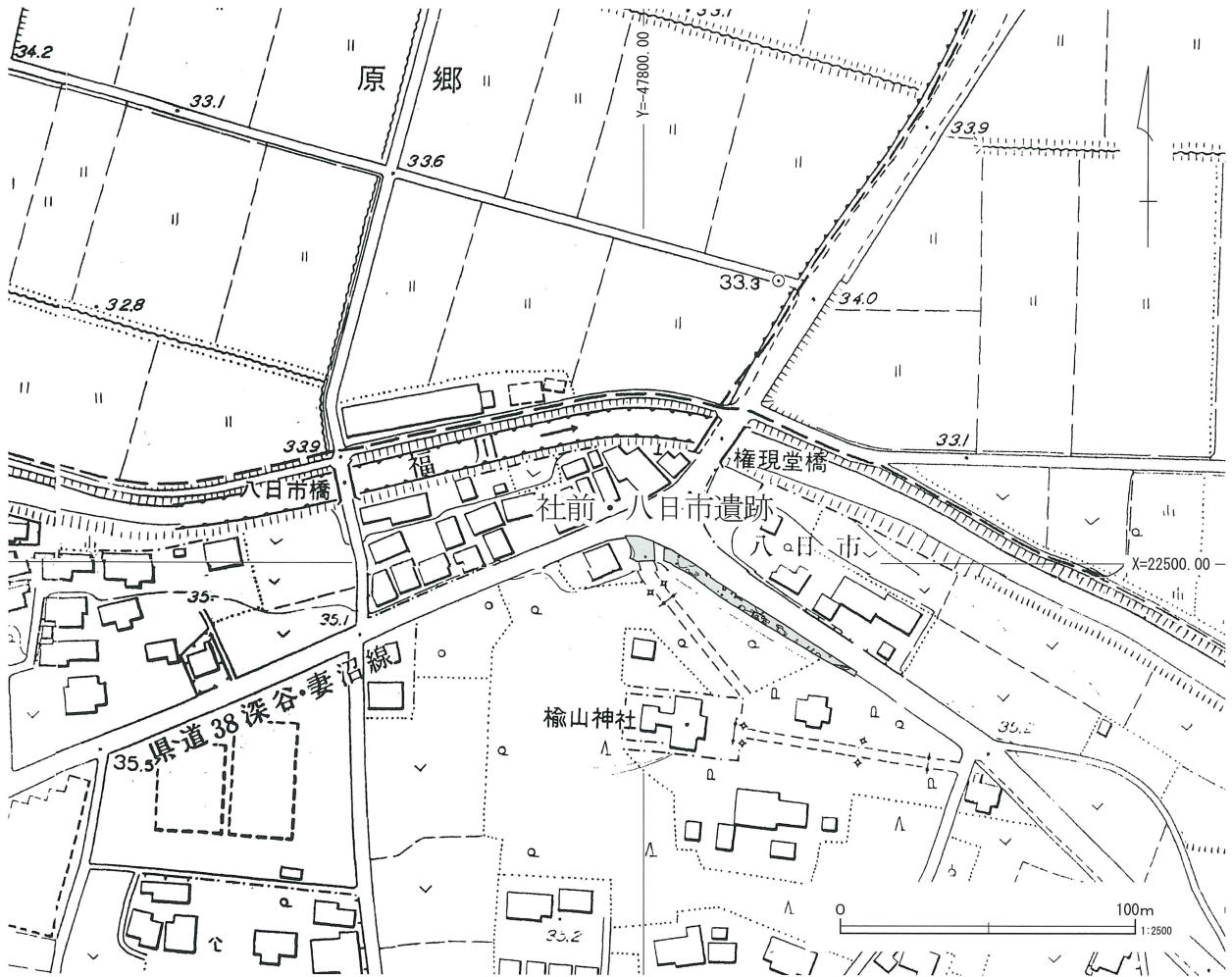
したところ、楡山神社北側に沿った部分が調査対象地となった。幅4m前後で総延長約90mと細長く、楡山神社を頂点とする「へ」の字状を呈する範囲で、丁度その中央付近（CF-12グリッド）に両遺跡の境があり、西が八日市遺跡、東が社前遺跡となる。但し、本章及び次章の遺構説明では、特に遺跡を分けずに一括して扱うこととする。

基本層序は、調査区の西端で確認した（第4図）。現代の表土は、地表下20～30cmほどで、その下位に浅間A軽石を多量に含むⅡ層、ロームブロックを含み近世～中世のⅢ層、黒褐色で古代の遺物を多く含むⅣ層と続き、今回調査された奈良・平安時代の遺構のほとんどがⅢ層下位～Ⅳ層上面から掘り込まれていることから、古代の生活面を特定することができた。

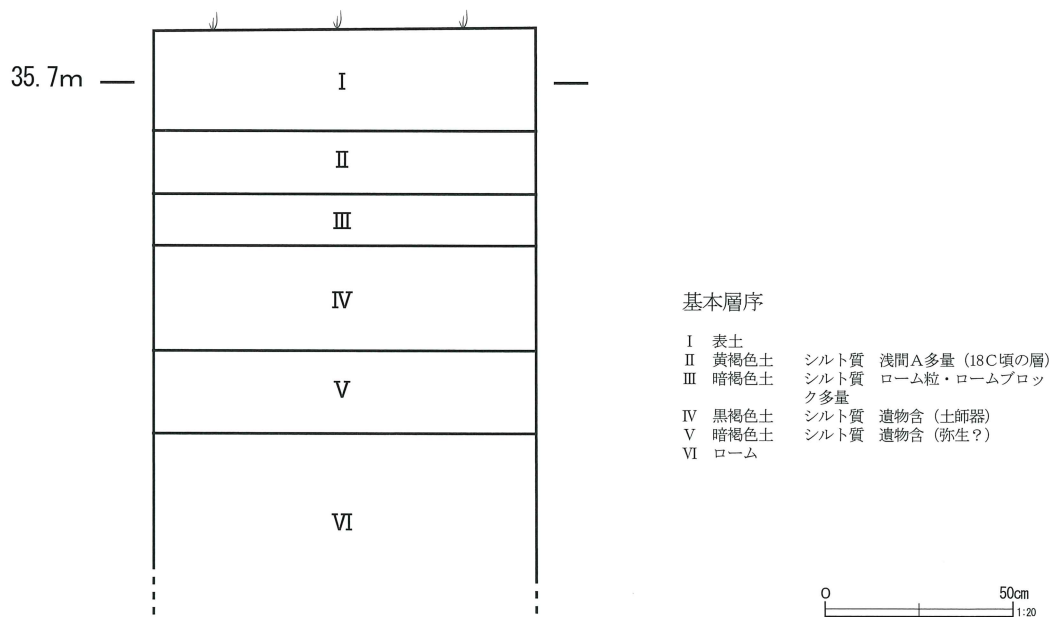
検出された遺構は、竪穴住居跡7軒、溝跡1条、土壙11基、ピット15基である。但し、遺物の出土量は比較的少なく、コンテナ2箱であった。

住居跡は、7軒検出されたが、調査区が細長いこともあり1軒全てを調査できた住居跡はなかった。また、第1号住居跡以外の6軒は重複が著しく、土層断面の観察でしか判断できない部分も多かった。東側にカマドを有するものが多く、遺物の出土は少ないものの、何れも奈良・平安時代（8世紀後葉～9世紀）の遺構と判断される。なお、単独で検出された第1号住居跡は9世紀中葉に比定され、同じく9世紀中頃の遺物が検出された第2号住居跡に切られている第3号住居跡は、出土遺物からも8世紀末葉～9世紀初頭の所産と考えられる。

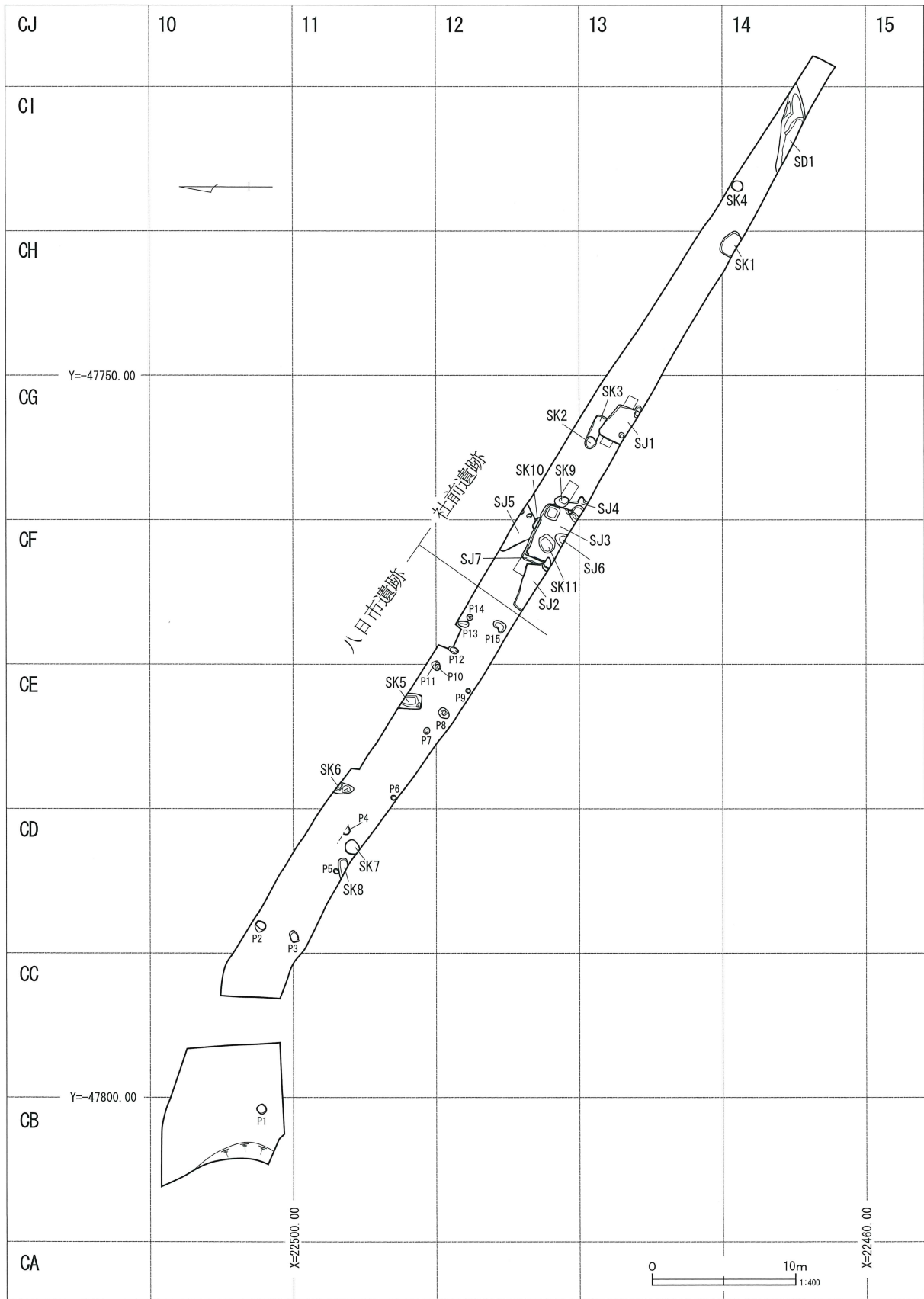
他に、溝跡・土壙・ピットが検出されたが、遺物の出土が非常に少なく、所属時期を特定できないものが多かった。



第3図 遺跡調査範囲



第4図 基本層序



第6図 調査区全体図

IV 遺構と遺物

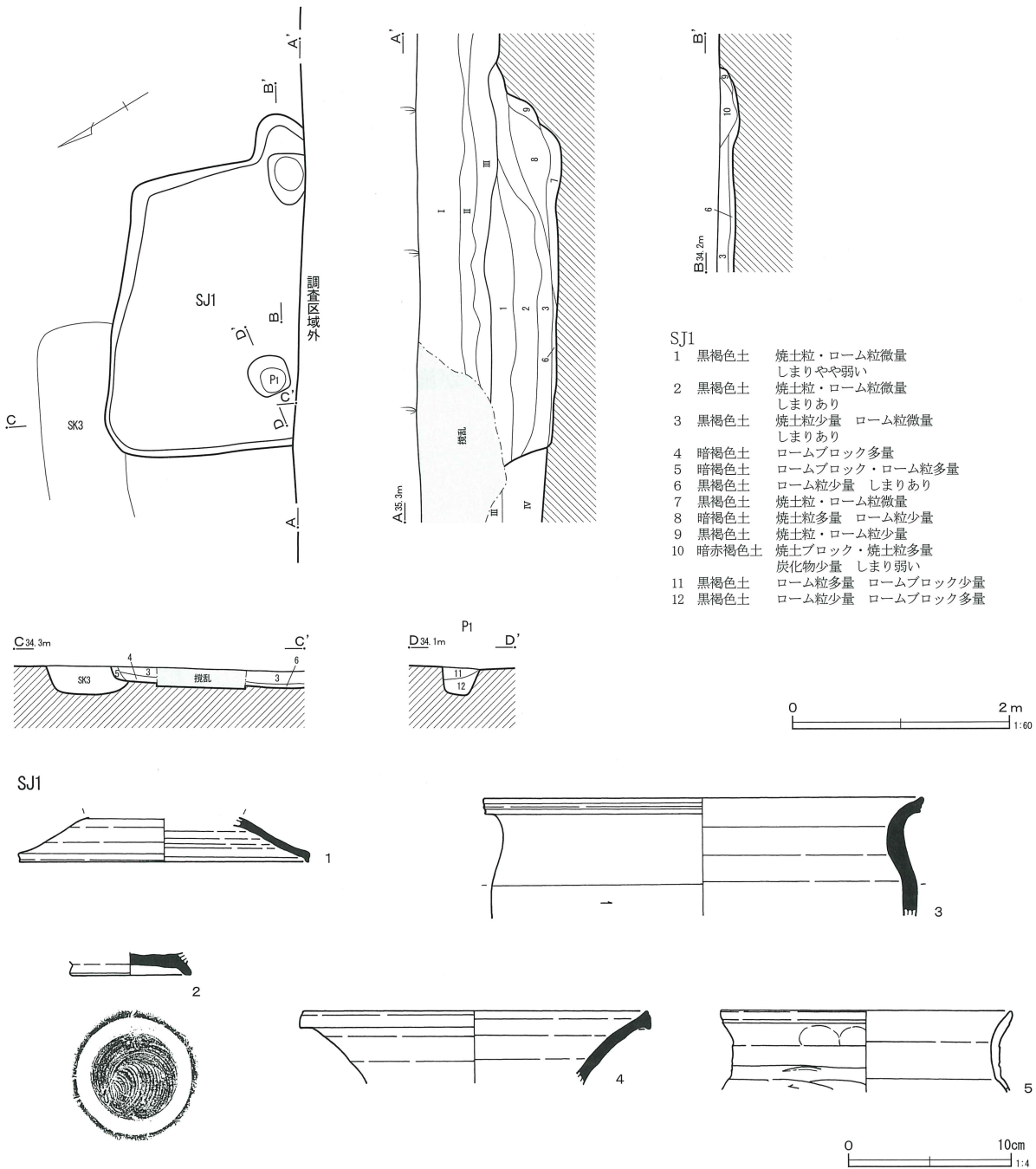
1. 住居跡

第1号住居跡 (第7図)

第1号住居跡はCG-13グリッドに位置する。南半分が調査区域外になるが、カマドを含む1/2強の面積を調査することができた。また、北西隅で第3号土壌と切り合っているが、土層確認の結果、

第3号土壌よりも新しいことが判明した。

平面形は、北東隅がやや内側に入り込んだ方形を呈するようで、規模は長径3.0m、短径1.66m(現存部分)、床面までの深さ約0.15mを測る。但し、南側の土層断面を観察した結果、Ⅲ層下部の



第7図 第1号住居跡

標高約34.5m（生活面）から掘り込みが認められ、住居構築当時は約0.6～0.7mの深さをもっていたものと思われる。主軸方位は、N-60°-Wである。

床には、厚さ4～10cmほどの貼り床が認められ（6・7層）、床面はほぼ平坦に硬く仕上げられている。

覆土は、比較的しまりのよい黒褐色土の自然堆積状態を呈するが、特に8層には、カマドに由来すると思われる焼土粒子が多量に含まれる。

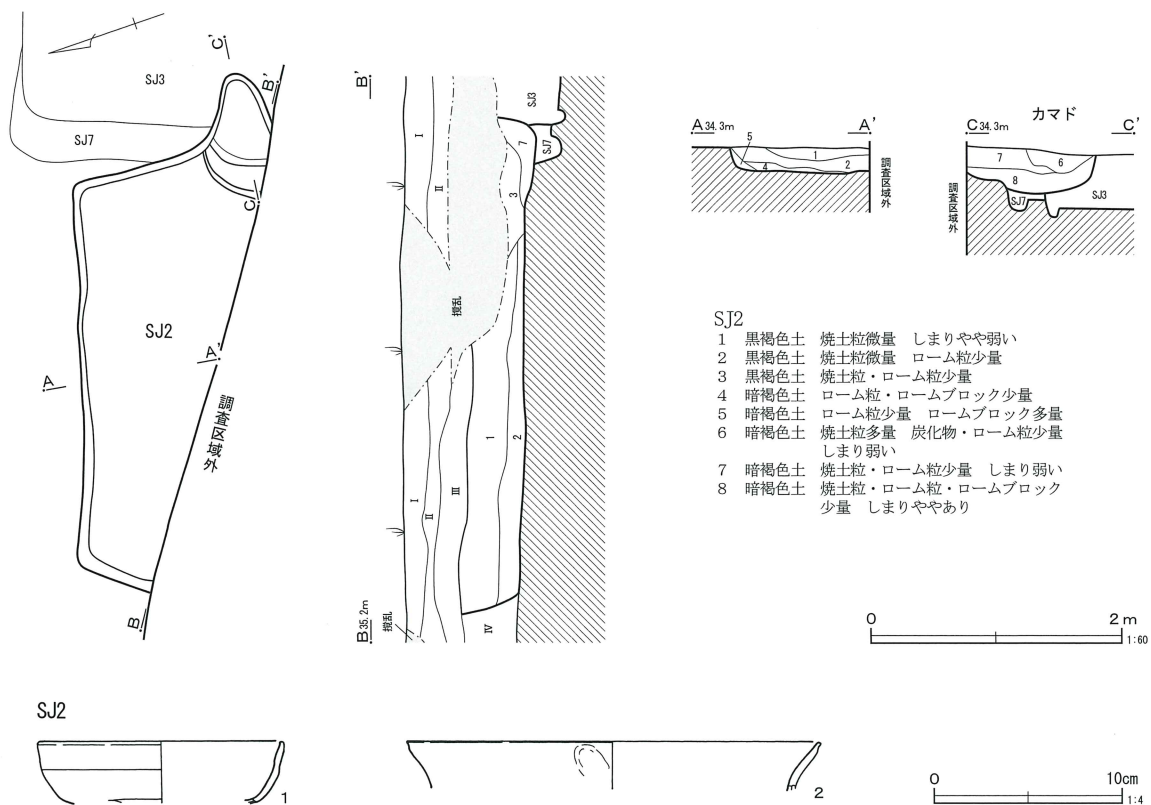
カマドは、東壁のほぼ中央に設けられているが、残存しているのは深さ16cm程度で、袖部等の施設は確認できなかった。なお、焼土粒子・炭化物のほか焼土ブロックを含む10層は、カマド天井部等の崩壊に起因する層と思われる。

ピットは、1基検出された（P-1）。規模は、径40～45cm、深さ20cm程で、柱痕は確認できなかったが、ロームブロック等を多量に含む覆土は人為的に埋め戻された可能性が高い。

出土遺物は、主にカマド付近とP-1から出土

し第7図1～5に図示した。

1は、胎土に片岩を含む末野産の須恵器蓋である。天井部はやや高く張りをもち、端部は短く折り返され、推定口径17.6cmとやや大きい。2は、須恵器高台付塊である。胎土に片岩を含み末野産である。底部および高台部が残存し、体部が欠損している。器壁やや厚く高台部の貼り付けは丁寧に施されている。3は、須恵器鉢である。胎土に片岩を含み末野産である。形態は、口縁部が外傾に外反し、受け部を作り出している。肩部はやや張りをもち膨らむ。口縁部が外反する内面の受け口部分には、使用痕と見られる磨耗があり、蓋の使用による擦痕の可能性が考えられる。焼成は堅致で色調は茶灰色である。4は須恵器甕の口縁部破片である。内外の器壁面には自然釉が付着する。焼成は堅致である。5は、「コ」の字状口縁甕の口縁部破片である。口縁部には丁寧なヨコナデが施されている。



第8図 第2号住居跡

第2号住居跡 (第8図)

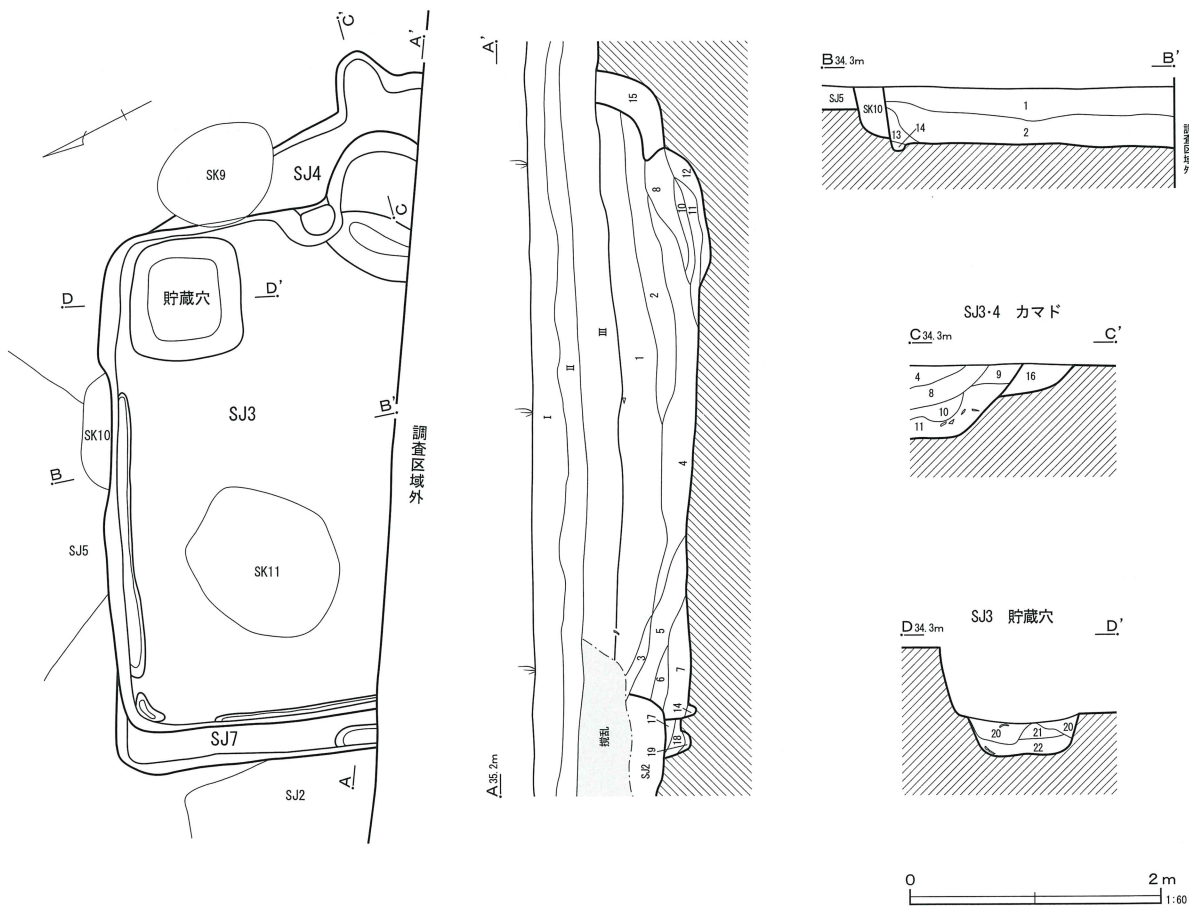
第2号住居跡は、CF-12グリッドに位置する。南西部分が調査区域外になるが、カマドを含むほぼ1/2の面積を調査することができた。また、東側のカマド部分で第3号住居跡及び第7号住居跡と重複関係にあり、両者を切って作られている(両者より新しい)。

平面形は、やや西側が膨らむ方形を呈し、規模は長径3.44m、短径1.12m(現存最大部分)、床面までの深さ約0.24mを測る。但し、南側の土層断

面を観察した結果、IV層上面の標高34.5m(生活面)付近から掘り込みが認められ、住居構築当時は約0.5mの深さをもっていたものと思われる。主軸方位は、N-57°-Wである。

床面は、概ね平坦に作られているが、壁溝・ピット・貯蔵穴等は検出されなかった。

遺構は、第3号住居跡と同様に地山IV層の上面から掘り下げられているが、床面までの深さには30cm程の差があり、貼り床・掘り方等は確認できなかった。カマドは、南東壁に設置されるが遺存



SJ3・4・7

- 1 黒褐色土 焼土粒少量 しまり弱い
- 2 黒褐色土 焼土粒・ローム粒少量 しまり弱い
- 3 黒褐色土 焼土粒・炭化物少量 しまり弱い
- 4 黒褐色土 焼土粒・炭化物・ローム粒少量 ロームブロック微量 しまり弱い
- 5 暗褐色土 焼土粒・炭化物少量 ローム粒多量 しまりややあり
- 6 暗褐色土 焼土粒・炭化物少量 焼土ブロック微量 ローム粒少量 しまりややあり
- 7 暗褐色土 焼土粒・炭化物・ローム粒少量 しまり弱い
- 8 暗褐色土 焼土粒・炭化物少量 ローム粒多量
- 9 暗褐色土 ローム粒多量 焼土粒少量
- 10 暗黄褐色土 ロームブロック多量 粘土(天井崩落土)
- 11 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック・炭化物・ローム粒多量

- 12 暗褐色土 焼土粒・炭化物少量 ローム粒・ロームブロック多量
- 13 黒褐色土 ローム粒多量
- 14 暗褐色土 焼土粒微量 ローム粒多量 しまりあり 壁溝覆土
- 15 黒褐色土 焼土粒・ローム粒少量
- 16 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土ブロック多量 炭化物少量
- 17 黒褐色土 ローム粒少量 しまりやや弱い
- 18 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
- 19 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり強い
- 20 暗褐色土 ロームブロック(φ1cm)多量 炭化物・焼土粒少量 しまりあり
- 21 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量 炭化物少量 しまり弱い
- 22 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土ブロック・炭化物多量 しまり弱い

第9図 第3・4・7号住居跡

状態がわるく、袖部等は検出できなかった。僅かに6層が天井部等の崩壊に起因するものと判断される。

出土遺物は、住居跡確認面付近で検出し、第8図1・2に図示した。1は、土師器坏の破片である。形態は、平底気味で体部が外傾にやや内湾気味に立ち上がり、口縁部が上方に立つ。調整は、口縁部ヨコナデ、体部指押さえによる未調整、底部ヘラケズリを施している。2は、「コ」の字状口縁甕の口縁部破片である。

第3号住居跡（第9～12図）

第3号住居跡はCF-12～CG-12グリッドに位置する。南半分が調査区域外になるが、カマドを含む1/2強の面積を調査することができた。

本住居跡は、第2・4・6・7号住居跡及び第9～11号土壙と重複関係にあり、前述したとおり第2号住居跡に切られている。また、南側の土層断面を観察した結果、東側で重複する第4号住居跡及び西側で重複する第7号住居跡の何れも切っている（何れよりも新しい）ことが判明した。なお、土壙については別図に記載するが（第17図）、第10号土壙は第3号住居跡に切られており、他の2基はこれらの住居跡よりも新しいものである。

平面形は、比較的整った長方形を呈し、規模は長径4.46m、短径2.24m（現存部分）、床面までの深さ約0.45mを測る。但し、南側の土層断面を観察した結果、IV層上面の標高約34.4m（生活面）から掘り込みが認められ、住居構築当時は、約0.6～0.7mの深さをもっていたものと思われる。主軸方位は、N-66°-Wである。

覆土は、比較的自然な堆積状況を示すが、西壁部分でローム土を多量に含む層が斜位に観察され、人為的な埋め戻し等も想定される。

カマドは、南東壁のほぼ中央と思われる部分に設けられる。比較的遺存状態は良く、袖部も一部検出された。燃焼部の下位に堆積し、粘土・焼土

ブロックを多量に含む10・11層は、天井部の崩壊に起因する層と思われる。なお、カマド内から多量の土器片が出土しているが（第10図）、そのほとんどが10・11層からの出土であり、住居廃絶時の資料と考えてよいであろう。

床面には、部分的に非常に硬い貼り床が認められ、また壁溝及び貯蔵穴が検出された。

壁溝は、北東から北西にかけて壁直下に検出された。数cm程度と浅く、貼り床後に設けられたようである。

貯蔵穴は、カマドの左側、住居跡北東隅に検出された。長径96cm、短径87cmとほぼ隅丸正方形を呈し、深さは約30cmを測る。覆土の堆積状況からは、住居廃絶後に人為的に埋め戻されたものと判断される。

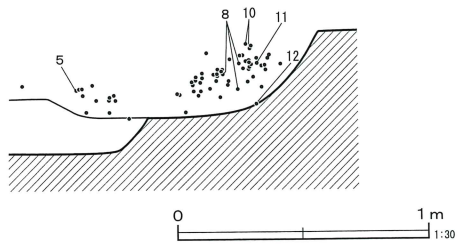
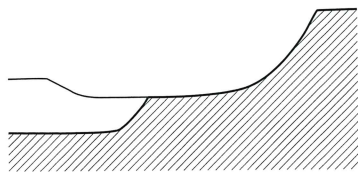
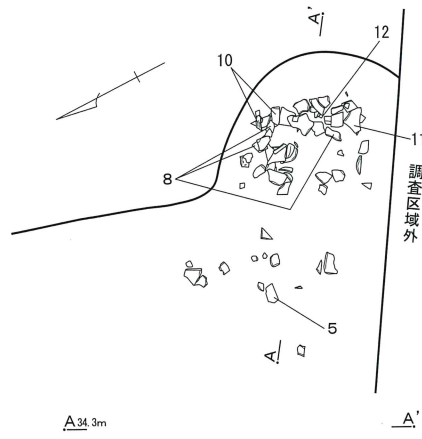
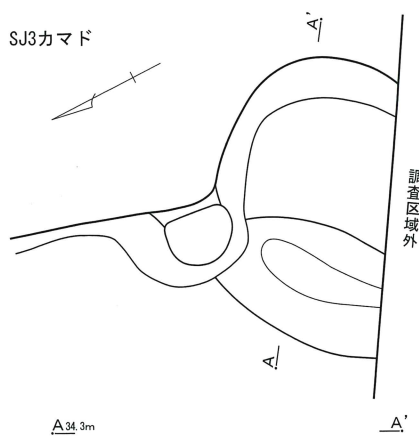
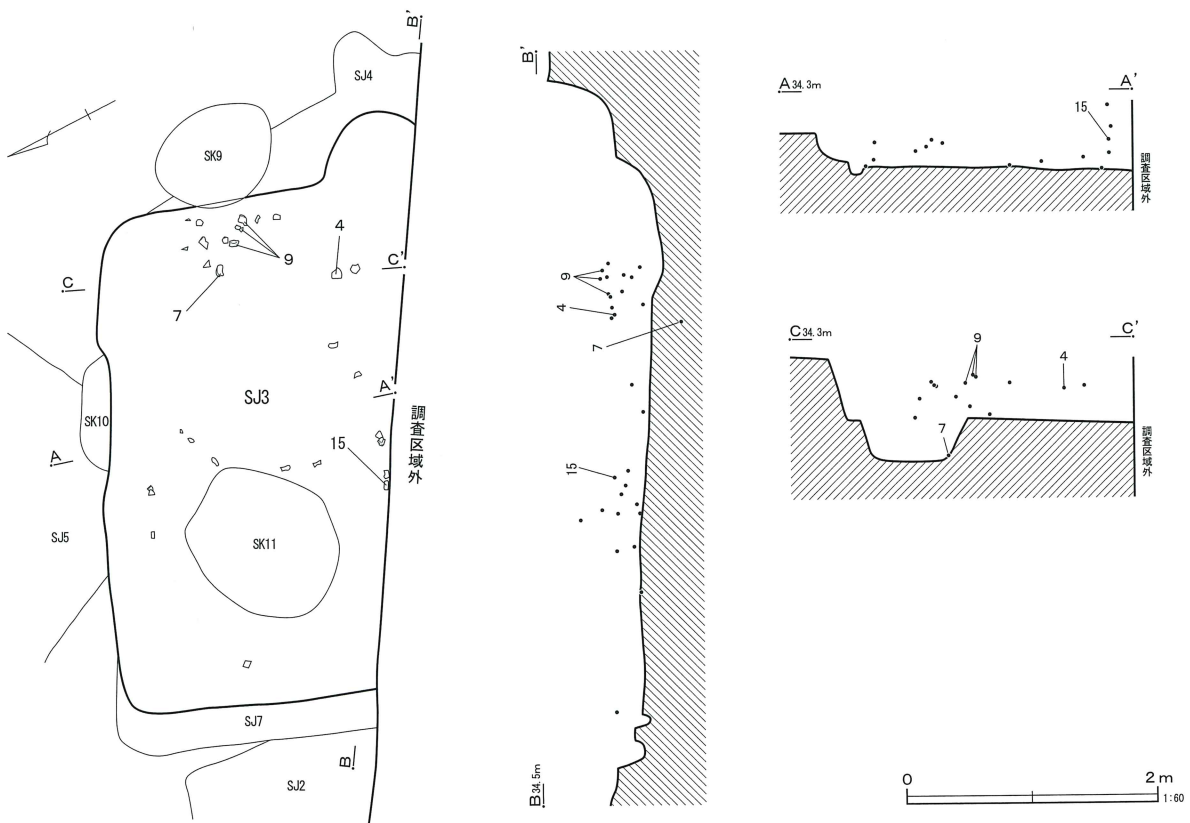
調査終了後、床面を除去したところ、住居中央部を掘り残し壁際を一段深く掘った、方形周溝状の掘り方が検出された（第12図）。また、住居中央部及びカマドの北側から、いわゆる床下土壙とされる掘り込みが検出された。

出土遺物は、第11図1～15に図示した。

1・2は須恵器蓋である。法量が大きいことから時期的に古いと判断され、混入品の可能性が考えられる。1は端部が短く折り返されている。外面には重ね焼きによる色調の違いが認められる。胎土に針状物質を含み南比企産である。2は天井部の破片で、胎土が粗雑で石英、黒色粒子を含み末野産である。

3は須恵器坏の底部破片である。底部の器壁やや厚く、外面には糸切り痕が見られる。胎土から南比企産と判断した。4は須恵器碗である。

5～9は土師器坏である。7は貯蔵穴からの検出で、形態は丸底気味の底部で時期的に古いと判断され混入品である。8は平底で体部が外傾に内湾気味に立ち上がる。調整は内面ナデ、外面はヘラケズリが施されている。9は底部裏面に「文」?の墨書が見られる。形態は平底で体部が



第10図 第3号住居跡遺物分布図

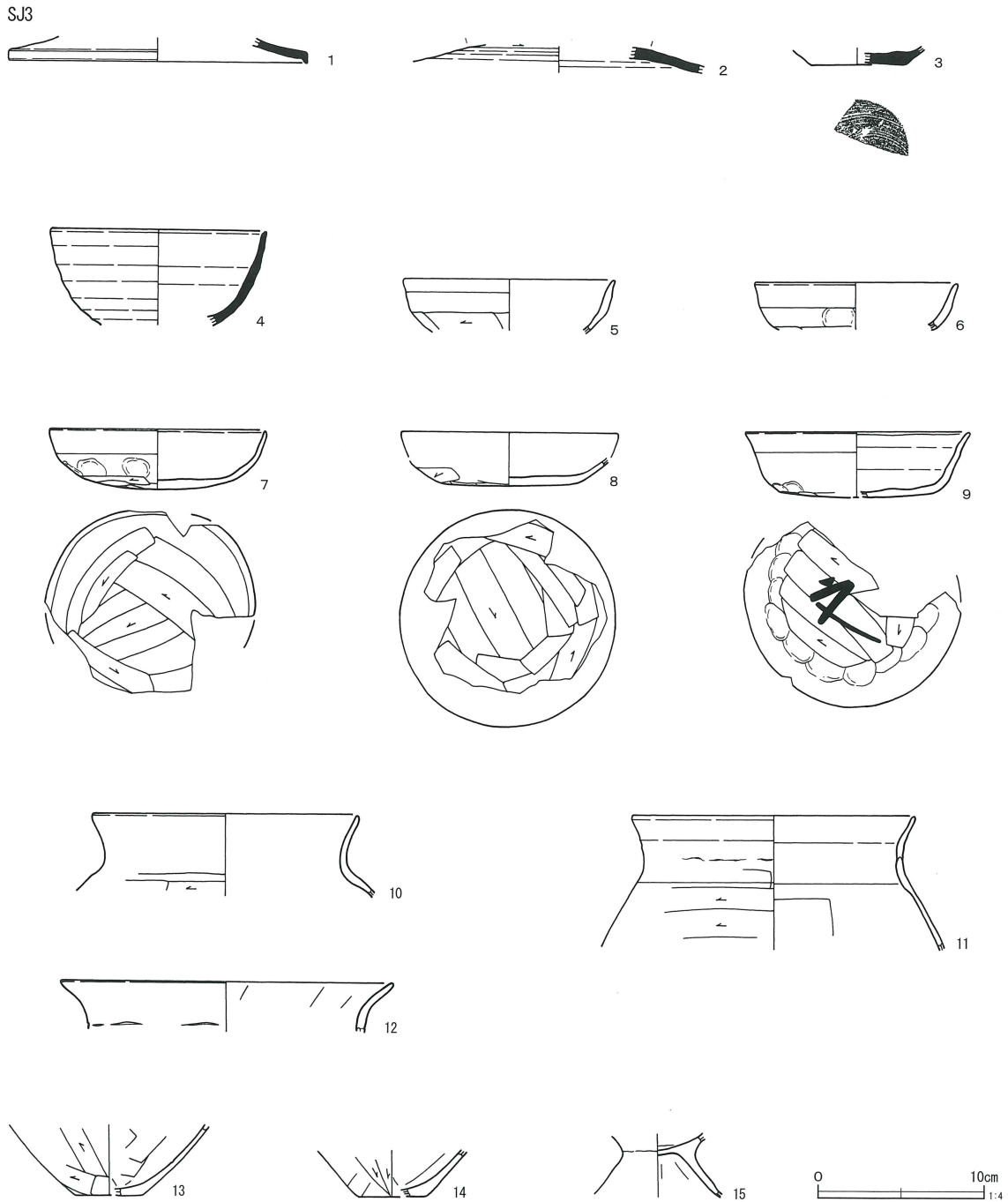
外傾に内湾気味に立ち上がり、口縁部僅かに外反する。調整は口縁部から内面ナデ、体部外面は指押さえ、底部はヘラケズリが施されている。10～14は土師器甕である。いずれも「コ」の字状口縁甕で器壁は薄い。11は口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリを施す。10～12の土師器甕はいずれもカマド内から検出されている。13・14は底径の小

さい甕の底部破片である。

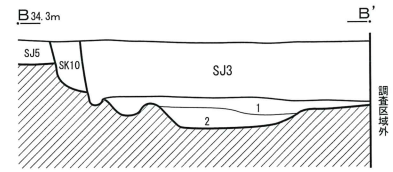
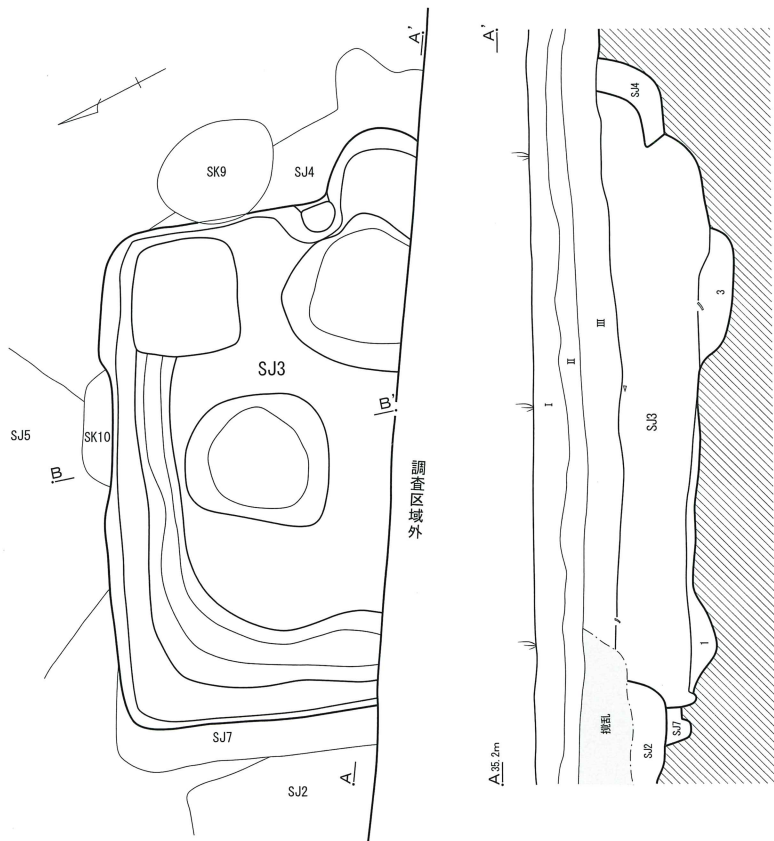
15は土師器台付甕の脚部である。

第4号住居跡（第9図）

第4号住居跡は、第3号住居跡の南東側に位置するが、そのほとんどが第3号住居跡及び第9号土壇によって壊されており、僅かにカマド付近の



第11図 第3号住居跡出土遺物

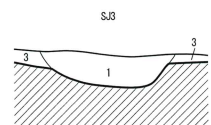
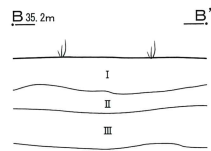
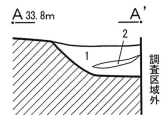
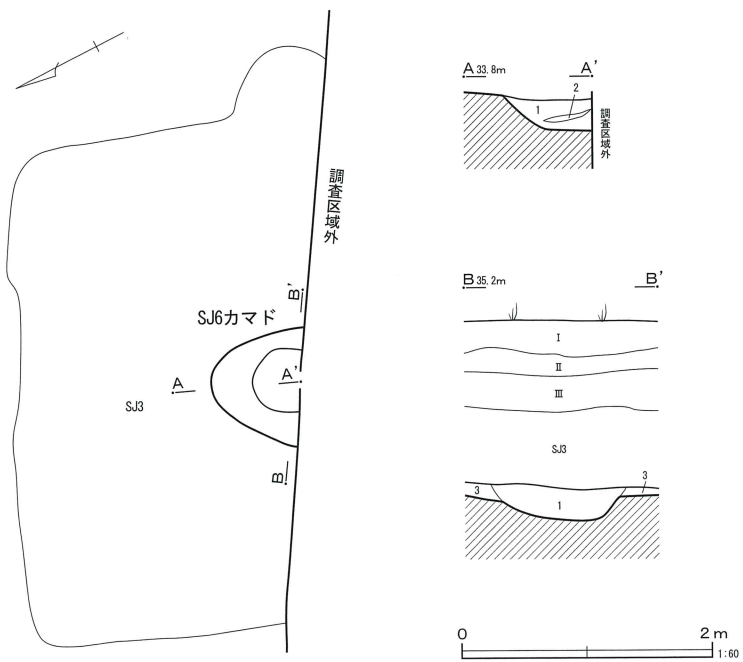


SJ3 掘り方

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量 焼土粒少量
極めて硬い
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック少量 しまり強い
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量 極めて硬い



第12図 第3号住居跡掘り方



SJ6



SJ6 カマド

- 1 赤褐色土 ローム粒少量 焼土ブロック・焼土粒・炭化物多量 しまり弱い
- 2 黄褐色土 粘質土 ロームブロック多量 焼土ブロック少量 しまり弱い
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量 極めて硬い

第13図 第6号住居跡

みが検出された。

平面形は明確ではないが、深さは0.3mほどで遺存状態はわるく、遺物も検出されなかった。なお、南側の土層断面の観察によれば、掘り込み面（生活面）は第3号住居跡とほぼ同じで、住居構築当時の深さは0.5m程度のものである。主軸方位は、凡そN-2°-Eとなる。

第7号住居跡（第9図）

第7号住居跡は、第3号住居跡の北東側に位置するが、そのほとんどが第3号住居跡によって壊されており、僅かに北西壁のみが検出された。

平面形は明確でなく、遺物も検出されなかった。調査時の深さは30cm程度で、一部に壁溝を有するようである。

第6号住居跡（第13図）

第3号住居跡の床下から検出された掘り込みを第6号住居跡とした。焼土を多量に含む覆土と、その形状からカマドの燃焼部と判断した。また、南側の土層断面の観察では、燃焼部の両側に貼り床と思われる堅緻な層が確認できた。但し、カマドだとすると、その形状から北もしくは北東方向

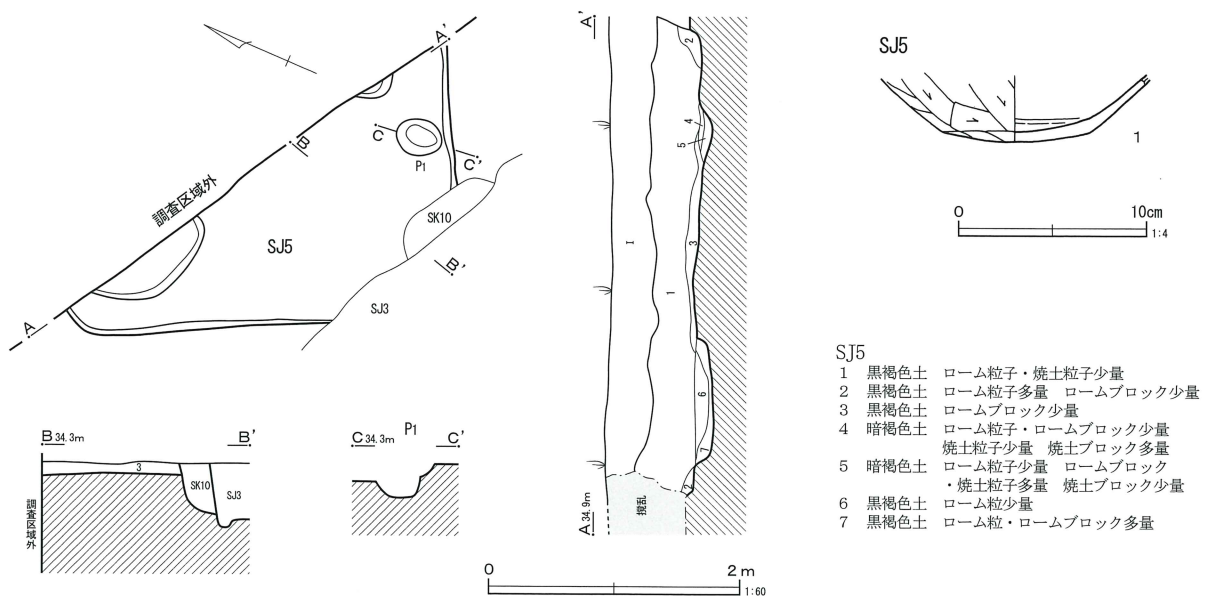
に主軸をもつ住居跡となり、1～4号住居跡とは90°近く主軸方向がずれることになる。

遺物は、土師器片22点、須恵器片3点の計25点が出土した。図示できたのは第13図1の須恵器杯の1点のみである。平底で器壁の薄い底部破片である。ロクロ成形により底部外面は回転糸切りである。胎土から末野産と判断した。

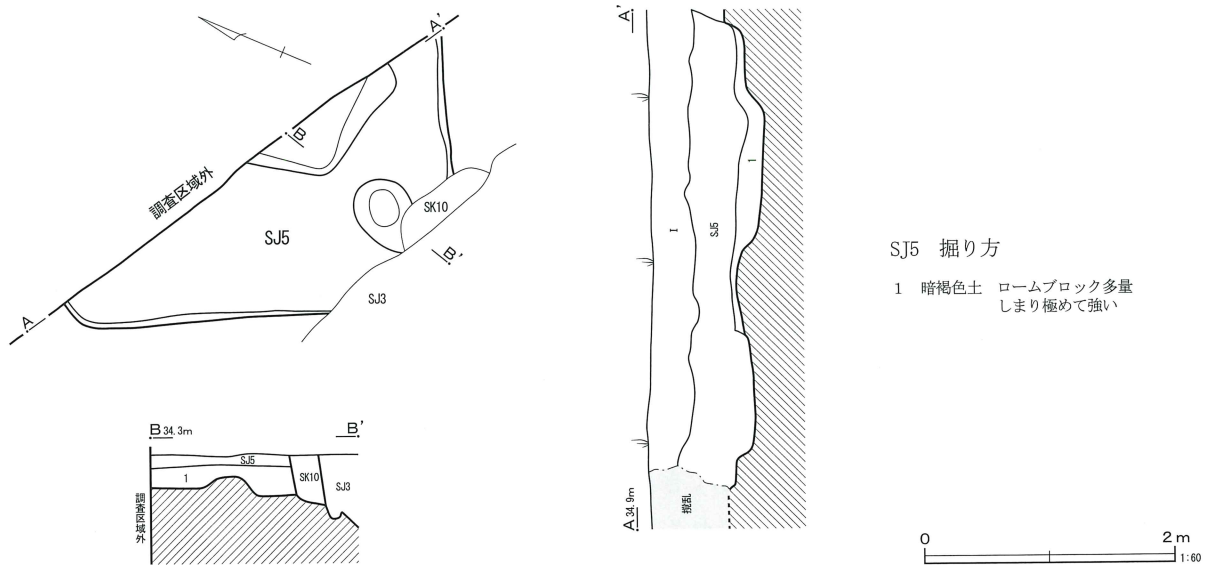
第5号住居跡（第14・15図）

第5号住居跡はCF-12～CG-12グリッドに位置する。北部分が調査区域外になるが、形状からはほぼ1/2近くの面積を調査できたものと思われる。また、南側のコーナー部分で第3号住居跡及び第10号土層と重複関係にあり、両者より古いことが確認された。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われ、北西コーナー部分を勘案すれば、南北方向は約3.1mと推測される。なお、床面までの深さは0.3m程であるが、北側の土層断面の観察によってもI層下部の標高34.5m付近から掘り込まれており、構築当時でも深さ約0.4mと比較的浅い住居のようである。主軸方位は、東西方向を長軸とすれば凡そN-64°-Eとなる。



第14図 第5号住居跡



第15図 第5号住居跡掘り方

床面には、厚さ数cmほどの貼り床が認められ、概ね平坦に硬く仕上げられている。壁溝は検出されなかったが、北西コーナー付近で深さ13cm程の掘り込みが検出された。遺物の検出はなかったが、貼り床を切って作られており、貯蔵穴など床面上で機能する施設と考えられる。また、北東隅の床面上に、焼土を多量に含む浅い掘り込みが検出された。北側部分が調査区域外にかかるが、略円形とすれば直径40cm、深さ10cmほどになり、炉跡の可能性も考えられる。

ピットは、1基検出された(P-1)。規模は、径30~36cm、深さ17cm程で、柱痕等は確認できな

かった。

調査終了後、床面を除去したところ、遺構東側に2箇所の掘り込みが検出された。特に北側のものは、炉跡の可能性のある遺構の下部に掘り込まれ、貼り床と同様の土が充填されていた。

遺物は、床面直上から十数点が出土しているが、何れも小破片が多く、図示できたのは第14図1の土師器甕の1点のみである。甕は、底部僅かに丸味をもち底径8.2cmとやや大きく、胴部が外傾に大きく開いて立ち上がる丸甕の破片で、住居跡床面から検出された。

2. 溝 跡

第1号溝跡 (第16図)

第1号溝跡は、CI-14グリッドに位置し、調査区の東端を斜めに横切っている。比較的浅い溝で、約4mが調査区内にかかり、主軸はほぼ東西方向を向いているが、その幅は一定ではない。西端では推定幅2m、深さ0.4mを測るが、東端では幅約

0.5m、深さ0.1m程度に細く浅くなり、溝の終末の様相を呈する。覆土は、暗褐色~黒褐色を呈するが、ローム土の混入が多いことから、人為的な堆積を感じさせる。

出土遺物はなく、時期は不明である。

3. 土 壌

土壌は、社前遺跡7基、八日市遺跡4基の計11基が検出された。形状は略円形を呈するものが多

いが、長方形や楕円形を呈するものなどもあり多様である。また、調査区域全体から検出されてい

るものの、住居跡が検出されたCF-12及びCG-12～13グリッドに半数近くが集中していることも注意されよう。

第1号土壙 (第17図1)

CH-14グリッドの北東隅に位置する。南側が調査区域外になるが、現状で長径約1.7m、短径約1.1mを測る。形状は、方形もしくは不整形を呈するものと思われ、主軸方位は、凡そN-55°-Eとなる。深さは0.3m程で、底面は平坦ではない。出土遺物は少なく、何れも細片のため図示できるものはなかったが、凡そ9世紀台と考えられる。

第2号土壙 (第17図2)

CG-13グリッド北隅に位置する。東側で第3号土壙と重複関係にあり、覆土の観察からは第3号土壙を切っている(第3号より新しい)。形状は、長径0.82m、短径0.78mの略円形を呈し、深さは0.27mである。底面はさほど平坦ではなく、時期

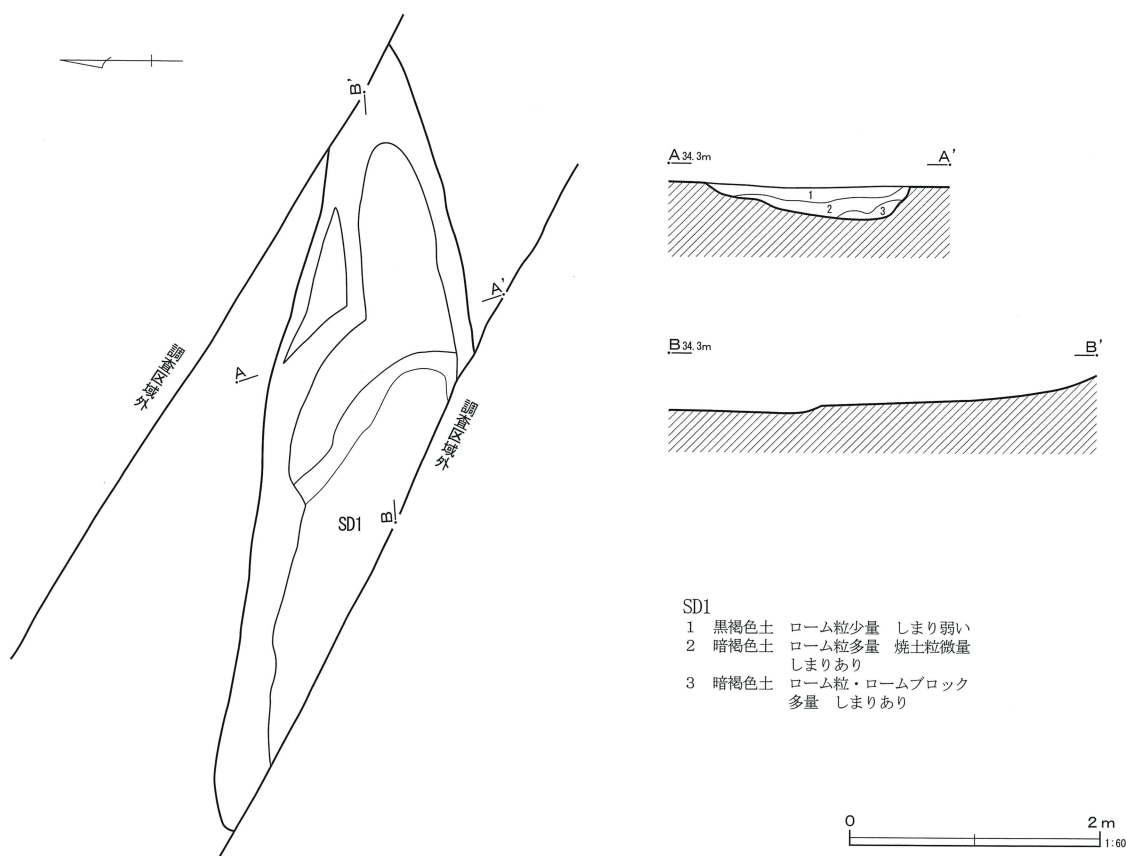
は不明である。

第3号土壙 (第17図3)

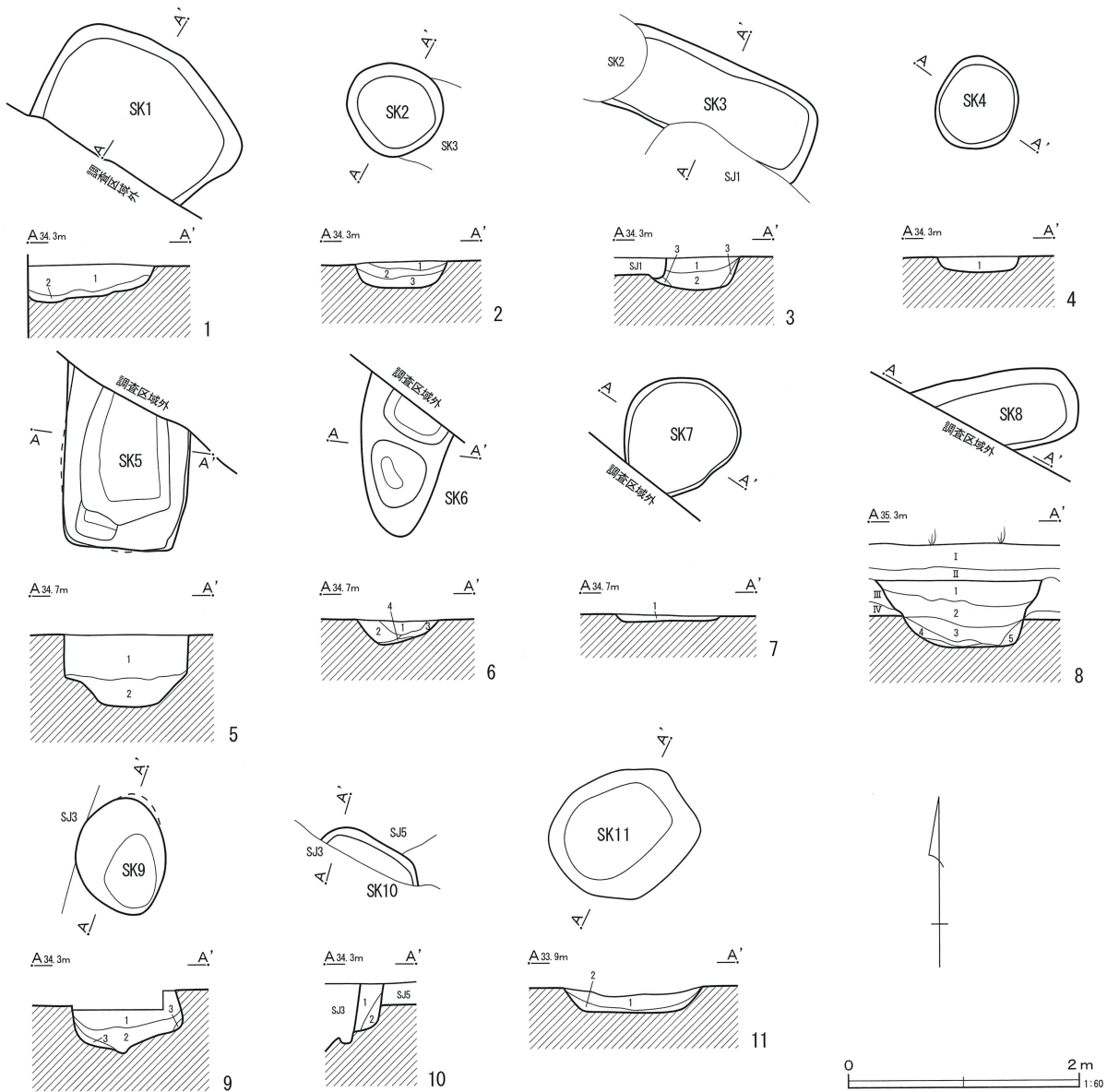
CG-13グリッド北隅に位置する。西側で第2号土壙と重複関係にあり、前述したとおり第2号土壙よりは古いと判断される。また、南側で第1号住居跡とも重複関係にあるが、土層断面からは第1号住居跡に切られている(住居跡より古い)ことが観察された。形状は略長方形を呈し、推定長径1.9m、短径0.78mで、深さは約0.3mである。覆土は、第2号土壙と同様に黒褐色土が主体だが、ロームブロックの混入が多いことから、人為的な埋め戻し等も想定される。主軸方位は、N-68°-Wである。

第4号土壙 (第17図4)

CL-14グリッドの北西隅で単独で検出された。形状は僅かに楕円形で、長径0.78m、短径0.68mを測り、深さ0.14mの浅い土壙である。遺物の出



第16図 第1号溝跡



SK1
 1 黒褐色土 ローム粒少量 焼土粒微量 しまりあり
 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量 しまりあり

SK2
 1 黒褐色土 ローム粒少量 焼土粒微量 しまり弱い
 2 黒褐色土 ローム粒少量 しまり弱い
 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量 しまりあり

SK3
 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量
 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量
 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

SK4
 1 黒褐色土 ローム粒少量

SK5
 1 黒褐色土 ロームブロック多量 ローム粒少量 しまりあり
 2 黒褐色土 ロームブロック多量 ローム粒少量 しまり強い

SK6
 1 黒褐色土 ロームブロック少量 しまり弱い
 2 黒褐色土 ロームブロック多量 しまり弱い
 3 黒褐色土 ローム粒少量 しまり弱い
 4 黒褐色土 ロームブロック多量 しまりあり

SK7
 1 黒褐色土 ロームブロック多量

SK8
 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒微量 しまりあり
 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量 しまりあり
 3 黒褐色土 ローム粒少量 焼土粒中量 しまりやや弱い
 4 黒褐色土 ローム粒中量 焼土粒少量 しまり弱い
 5 暗褐色土 ローム粒多量 しまり弱い

SK9
 1 黒褐色土 焼土粒・ローム粒少量
 2 黒褐色土 焼土粒多量 焼土ブロック・ローム粒少量
 3 黒褐色土 ロームブロック多量

SK10
 1 黒褐色土 焼土粒・ローム粒少量
 2 黒褐色土 ローム粒少量 ロームブロック多量

SK11
 1 黒褐色土 ローム粒少量 焼土粒微量 しまり弱い
 2 黒褐色土 ローム粒多量 ロームブロック少量 しまりあり

第17図 土壌

土はなく、時期は不明である。

第5号土壙 (第17図5・第19図1)

CE-11グリッドに位置する。北側が調査区域外になるが、現状で長径約1.6m、短径約1.1m、深さ0.56mを測る。形状は、長方形を呈するものと思われ、上半部は略垂直に掘り込まれているが、下半部は幅0.5mほどの底面に向かって急激に狭まっていく。覆土には多量のロームブロックが含まれ、人為的な埋め戻しも考えられる。主軸方位は、N-0°である。

出土遺物は、100点近くの土師器・須恵器片が検出されているが、何れも細片のため図示できるのは1点のみであった。1は土師器坏の口縁部破片で、口縁部が上方に立ち上がり、口唇部で外反する。口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ調整を施している。時期は、9世紀中葉であろう。

第6号土壙 (第17図6)

CE-11グリッドに位置する。北側が調査区域外になるが、現状で長径約1.1m、短径約0.8mを測る。形状は不明だが、不整楕円形を呈するようで、主軸方位は、凡そN-10°-Eである。深さは凡そ0.3mほどであるが、底面は平坦でなく、深く掘りこまれる部分が南北に2箇所認められた。覆土には、ロームブロックを多量に含む層が認められることから、人為的な埋め戻し等も考えられよう。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第7号土壙 (第17図7)

CD-11グリッドに位置し、第8号土壙と隣接する。南西側が僅かに調査区域外にかかる。形状は、1.04m×0.96mほどの不整円形を呈し、深さは約0.06mと極めて浅い掘り込みである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第8号土壙 (第17図8)

CD-11グリッドに位置し、第7号土壙の西側に隣接する。南西側は調査区域外になるが、現状で長径約1.4m、短径約0.7mを測る。形状はやや胴の張った長方形を呈するものと思われ、深さは0.3

mほどであるが、南側の土層断面の観察の結果、地山Ⅲ層上面(生活面)から掘り込まれており、本来は約0.6mの深さであることが判明した。覆土は、黒褐色土を主体とした自然堆積状態を示しており、出土遺物がないため時期は特定できないが、掘り込み面からは、8~9世紀とした住居跡よりも新しい時期の所産と判断される。

第9号土壙 (第17図9・第19図2)

CG-12グリッド南西隅に位置する。第3・4号住居跡と重複関係にあるが、覆土の観察からは、何れの住居跡よりも新しいようである。形状は、長径1m、短径0.8mほどの楕円形を呈し、深さは約0.5mである。底面は平坦でなくやや南東に寄っており、主軸方位は、凡そN-4°-Eである。

出土遺物は少なく、1点のみ図示した。第19図2は、土師器坏の口縁部破片である。口縁部が上方に立ち上がり、ヨコナデを施す。体部に未調整部分を残し、底部は欠損している。時期は9世紀初頭であろう。

第10号土壙 (第17図10)

CF-12・CG-12グリッドに位置し、第3号住居跡及び第5号住居跡と重複関係にある。形状は、長方形若しくは楕円形を呈するものと思われ、長径約1m、短径0.24m(現状)、深さ0.34mを測る。主軸方位は、N-59°-Wである。

出土遺物がないため時期は特定できないが、土層断面からは、第5号住居跡を切り、第3号住居跡に切られている(第5号住居跡より新しく、第3号住居跡よりも古い)状況が観察される。

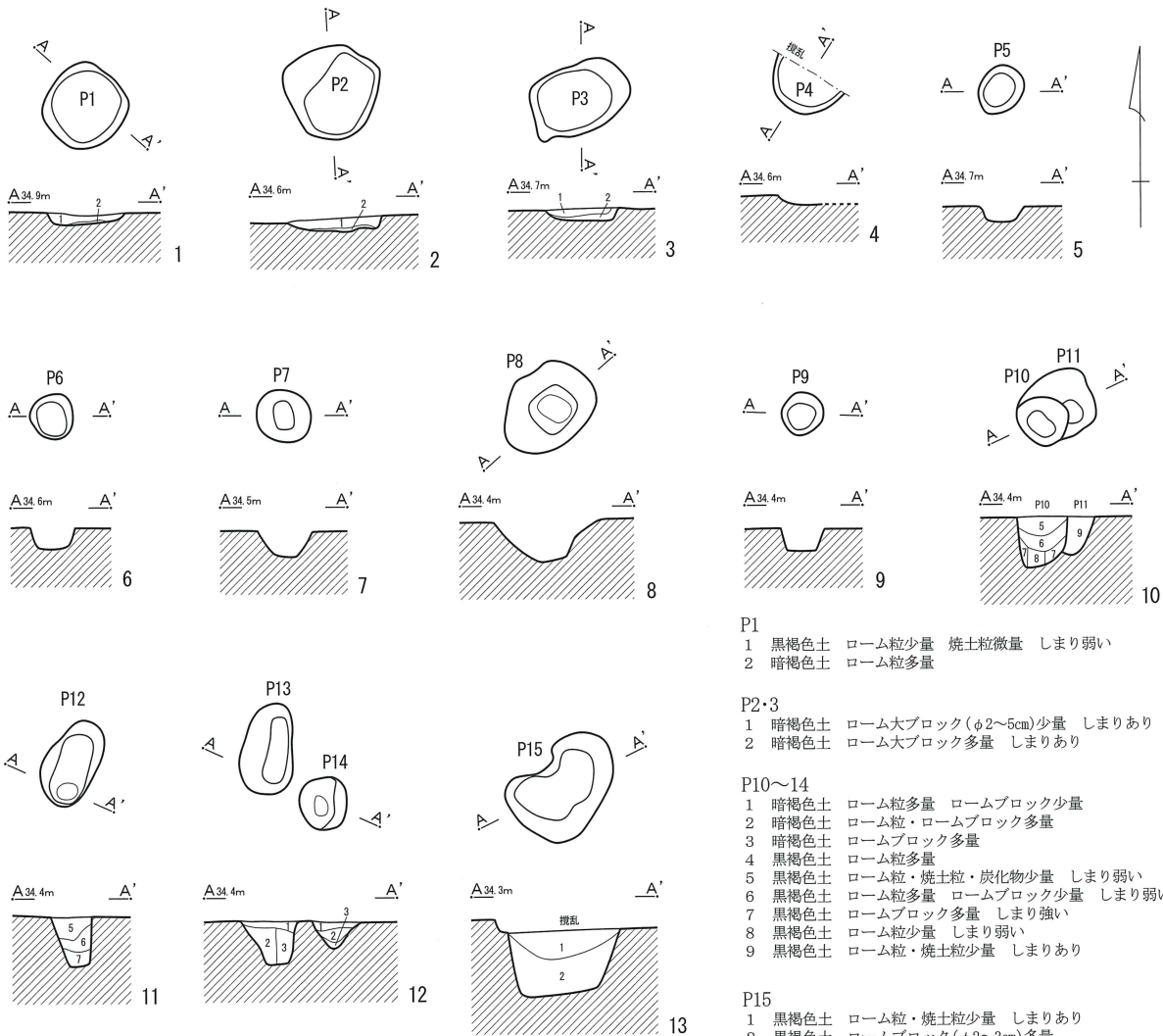
第11号土壙 (第17図11・第19図3・4)

CF-12グリッド南東隅に位置する。第3号住居跡と重複関係にあり、住居跡中央部の北西寄りに掘り込まれている。形状はやや胴の張った長方形を呈し、長径1.2m、短径1.08mを測る。図は第3号住居跡床面上での掘り込み状態を示すが、覆土の観察からも、住居跡を切って構築されているようである。

第11号土壌からは第19図3・4に図示した土師器の坏、甕の破片を検出した。3は土師器暗文坏である。形態は、平底で体部が外傾に内湾しながら立ち上がり、口縁部は上方に立つ。調整は、口縁部ヨコナデ、体部から底部外面を丁寧なヘラケズリの後、部分的にミガキが施されている。内面

には放射状暗文が施され、器壁は厚く焼成は堅致である。4は土師器の「く」の字状口縁甕である。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面は横方向のヘラケズリを行っている。

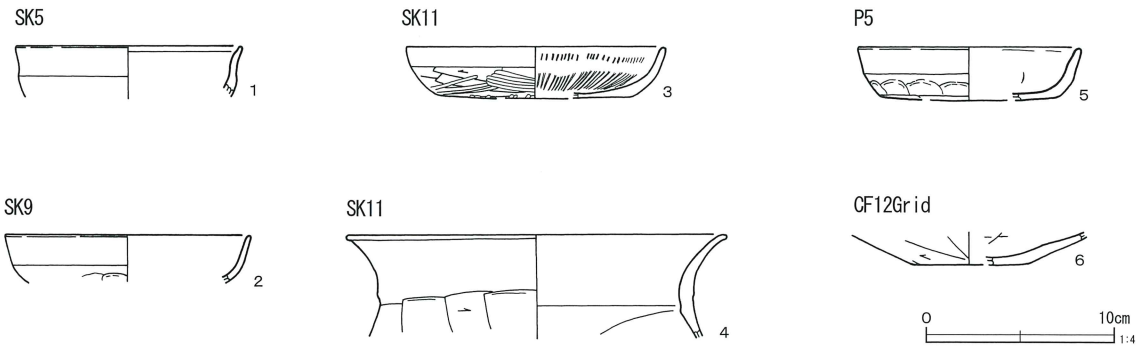
時期は、何れも9世紀初頭と考えられる。



第18図 ピット

第2表 ピット計測表

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
P1	CB10	0.66	0.63	0.11	
P2	CD10	0.75	0.72	0.15	
P3	CD10・11	0.78	0.60	0.15	
P4	CD11	(0.36)	0.60	0.06	
P5	CD11	0.39	0.36	0.15	
P6	CE11	0.36	0.36	0.17	
P7	CE11	0.45	0.42	0.21	
P8	CE12	0.84	0.60	0.34	
P9	CE12	0.36	0.36	0.16	
P10	CE12	0.42	0.39	0.40	
P11	CE11・12 CF11・12	(0.24)	0.54	0.34	
P12	CF12	0.72	0.36	0.45	
P13	CF12	0.75	0.42	0.36	
P14	CF12	0.42	0.42	0.26	
P15	CF12	0.90	0.60	0.56	



第19図 土壙・ピット他出土遺物

第3表 出土遺物観察表

遺構	挿図-番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	残存 (%)	焼成	色調	出土位置	備考	写真図版	
SJ1	7-1	須恵器	蓋	(17.6)	[2.7]	-	E	②	20	2	灰褐	カマドNo.3	末野産	7-1
SJ1	7-2	須恵器	高台付碗	-	1.3	7.2	A	②	10	1	灰	P1 No.23	末野産	7-2
SJ1	7-3	須恵器	鉢	(26.8)	[7.3]	-	A・E	②	10	2	茶褐	No.9	末野産	7-3
SJ1	7-4	須恵器	甕	(21.1)	4.5	-	I	①	5	2	灰白	P1 No.22		7-4
SJ1	7-5	土師器	甕	(16.8)	[5.0]	-	C・H	②	5	2	橙褐	No.11・12		7-5
SJ2	8-1	土師器	坏	(13.0)	[3.3]	-	C・D・H	②	5	2	橙褐	No.2確認面		
SJ2	8-2	土師器	甕	(22.0)	[2.5]	-	H	②	1	2	橙	No.1		
SJ3	11-1	須恵器	蓋	(17.8)	[1.5]	-	F・H	②	5	1	灰	CF-P2・CG-P2	南比企産	
SJ3	11-2	須恵器	蓋	-	[1.5]	-	H・I	②	5	2	灰白	CF12・CG12	末野産	
SJ3	11-3	須恵器	坏	-	[1.1]	(5.8)	F・H・I・J	②	20	1	灰		南比企産	7-6
SJ3	11-4	須恵器	碗	(12.8)	[5.8]	-	A・F・H	②	20	2	にぶい黄褐	No.8	南比企産	7-7
SJ3	11-5	土師器	坏	(12.6)	[3.1]	-	D・H・I	②	5	2	明褐	カマドNo.38		
SJ3	11-6	土師器	坏	(12.0)	[2.8]	-	D・I	②	5	2	橙	CF12・CG12		
SJ3	11-7	土師器	坏	(12.8)	3.6	-	C・H	②	60	2	橙褐	貯蔵穴No.104		7-8
SJ3	11-8	土師器	坏	-	-	-	C・H	②	10	2	橙褐	No.80・87・99 カマド		
SJ3	11-9	土師器	坏	13.6	4.0	-	C・D・H	②	60	2	褐	No.4・5・6	「文」墨書	8-1・2
SJ3	11-10	土師器	甕	(16.0)	[4.9]	-	C・D・G・I	②	5	2	橙	カマドNo.63・64		
SJ3	11-11	土師器	甕	(17.0)	[8.0]	-	D・G・H・I	②	5	2	にぶい褐	カマドNo.70		
SJ3	11-12	土師器	甕	(19.8)	[3.0]	-	D・G・H	②	5	2	にぶい褐	カマドNo.12 掘り方		
SJ3	11-13	土師器	甕	-	[4.3]	(4.0)	D・H	②	5	2	黄褐	掘り方		
SJ3	11-14	土師器	甕	-	[2.8]	(4.0)	D・G・H・I	②		2	赤褐	CF12・CG12		
SJ3	11-15	土師器	甕	-	[3.8]	-	A・D・G・H・I	②	10	2	にぶい赤褐	No.27		
SJ5	14-1	土師器	壺	-	-	-	D・H	②	5	2	茶褐	No.3・6		
SJ6	13-1	須恵器	坏	-	-	6.0	E・H	②	10	2	灰褐	カマド No.1	末野産	8-3
SK5	19-1	土師器	坏	(12.0)	-	-	C・H	②	5	2	橙褐			
SK9	19-2	土師器	坏	(13.0)	-	-	D・H	②	5	2	橙褐			
SK11	19-3	土師器	坏	(13.7)	2.7	-	D・H	①	10	2	橙	No.22		8-4
SK11	19-4	土師器	甕	(20.0)	[5.5]	-	D・H・I	②	5	2	にぶい褐	No.18・19		8-5
P5	19-5	土師器	坏	(11.8)	2.8	-	C・D・H	②	10	2	褐	No.1		8-6
CF12 CG12	19-6	土師器	壺	-	[1.8]	(6.2)	D・H	②	5	2	灰褐			

4. ピット

調査区域内からは単独のピット（小穴）が15基検出されたが、何れも八日市遺跡の範囲内で、住居跡がまとまって検出された社前遺跡北西部分とは明瞭に分かれる。但し、直径0.4m程の小規模なものから長径が0.8mを超える大型のものまで規模・形状とも多様であり、また調査区の幅が狭いこともあって、掘立柱建物跡などの規則的な配置は確認できなかった。また、第15号ピット以外は遺物の出土もなく、性格も不明とせざるを得ない。規模などの詳細は第2表ピット一覧表に記した。

5. グリッド出土遺物

第19図6は、CF-12グリッドで出土した土師器甕の底部破片である。形態は平底で胴部が大きく開いて立ち上がる。外面はヘラケズリ、内面はナデが施されている。器壁は薄い。

第20図に弥生土器を一括した。1～3は有文甕の肩部。1は条痕地に2条の沈線区画と湾曲気味の沈線で菱形文が施文される。2は2条の沈線区画に緩い弧線が、3は下端部1条の沈線区画に6条の沈線による同心円乃至渦巻状の文様が施される。3は工具を止めたためか列点状に痕跡が2条認められる。いずれも胎土は精緻で器壁は堅致。前期末から中期初頭。4～14、18は甕形土器胴部。条痕は斜行するものと交差するものがある。15～17は口縁部。15、16は口唇部を指頭押捺により緩い波状をなす。15は外面擦痕残り、16は単節LR縄文を斜方向に施文する。17は輪積状の隆帯が2

第15号ピット（第18図13）

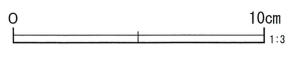
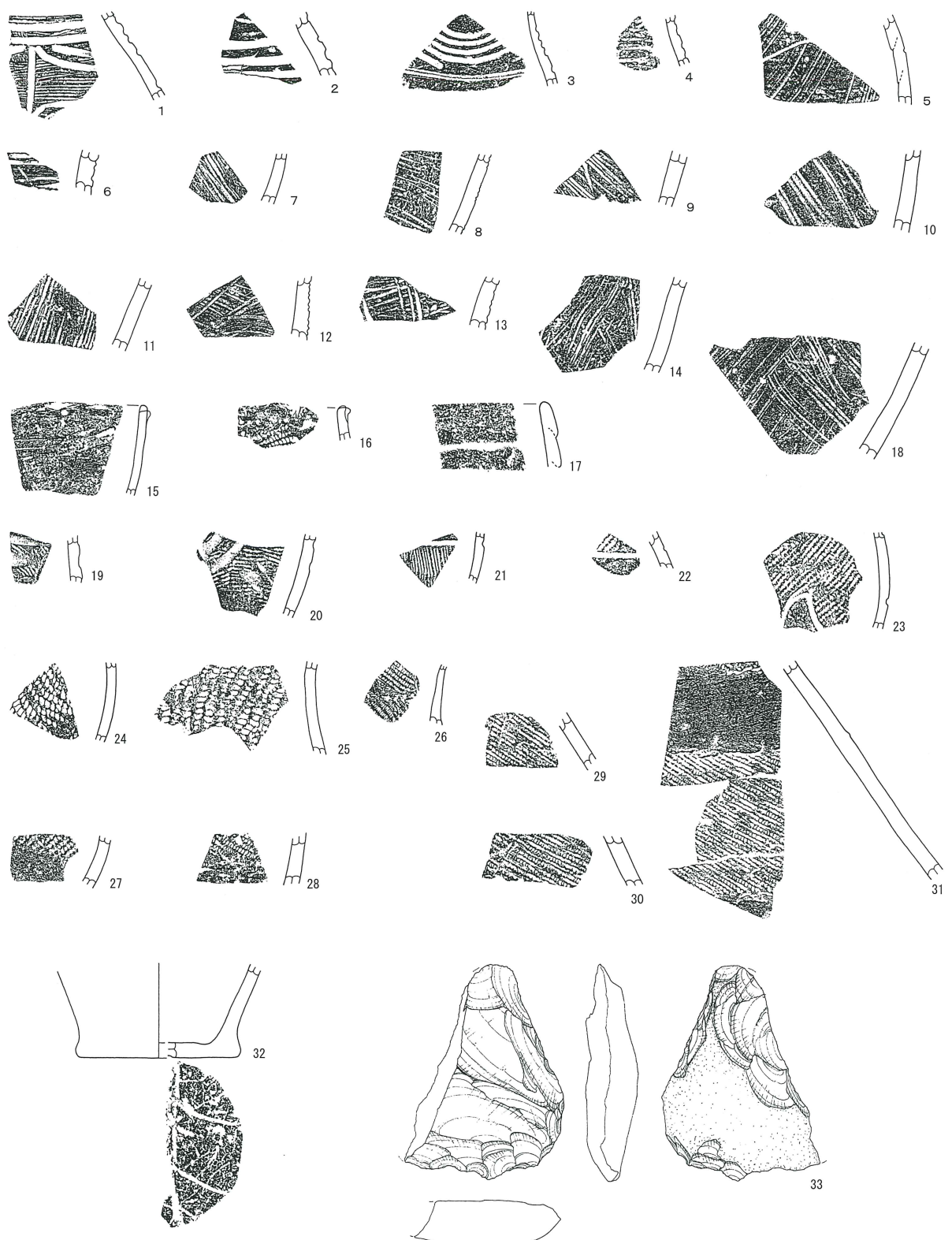
CF-12グリッドに位置し、攪乱の下部で検出された。形状は不整楕円形を呈し、長径0.91m、短径0.66mを測る。深さは0.4mほどで底面は略平坦だが、覆土にはロームブロックが多量に含まれており、人為的な埋め戻しも想定される。主軸方位は、凡そN-38°-Eである。

出土遺物は、土師器の坏1点のみ図示した（第19図5）。形態は、平底で体部が外傾に内湾気味に立ち上がり、口縁部は上方に立つ。調整は、口縁部ヨコナデ、体部未調整で、指頭による圧痕が残っている。底部外面はヘラケズリを施している。

条で、指頭撫でされる。

19、20は中期中葉の壺形土器胴部破片で、地文縄文にやや幅広の浅い沈線で弧線ないし同心円状の文様が施されるとみられる。21～25は中期後葉から後半の壺形土器胴部。21はカナムグラの横位回転後、沈線区画される。22はLR縄文施文後沈線区画される。23はLR縄文施文後沈線によりやや幅広の波状文が施文される。左上部に僅かに沈線の痕跡が残る。24、25はRL縄文が施される。

26～28は後期吉ヶ谷式土器甕形土器。26が口頸部、27、28は胴下半部で、27は多条のLR縄文、他はRL縄文が施される。29～31は同一個体とみられ、吉ヶ谷式土器の壺形土器頸部である。無文帯を挟んで上下に縄文帯が施される。多条のLR縄文で末端結束。32は底部で、木葉痕が残る。



第20図 グリッド出土遺物

V 調査のまとめ

社前・八日市遺跡で検出された遺構、遺物については、第Ⅲ章遺跡の概要で触れたとおりである。

遺跡は奈良・平安時代を中心とした集落遺跡で、竪穴住居跡は7軒調査された。検出された位置は調査区のほぼ中心部で、7軒がほぼ集中し、単独の第1号住居跡以外は重複していた。

第3号住居跡からは墨書土器が出土したが、遺物量が比較的少ないことを考えると、墨書土器の占有率は高かったことが窺われる。

他に同時期の遺構としては、土坑4基、ピット1基が、住居跡群とその周辺部に検出された。

ピット群は、竪穴住居跡群の西側に集中的に分布していた。出土遺物が無く所属時期も不明確で、掘立柱建物跡を確認できる程ではなかった。またほぼ南北方向に走行する溝跡が1条、調査区東端部で検出されている。

その他本遺跡では、グリッド及び住居跡埋土中から、少量ではあるが弥生土器が出土した。所属時期は前期末から中期初頭、中期中葉から後半、後期と比較的長期に亘るもので、特に前期末から中期初頭のもの注目すべきものである。埼玉県北部の同期の遺跡については、大略三地域、秩父盆地と、児玉地方、妻沼低地周辺部が、分布の集中する地域として知られていたが、近年の発掘調査の蓄積により、次第にその様相が明らかになりつつある。以下では中期を含めて関連する遺跡を概観することにより、本報告のまとめとしたい。

遺物の出土位置を見ると、当該期の遺物は第5号住居跡で1点出土しているが、他は全て調査区西端部のCB-10グリッドで出土した。中期のものは、CB-10の他、調査区中央付近のCE-11、CF-12グリッド、第3・5号住居跡埋土中からの出土である。後期ではCB-10グリッド出土は僅かで、大部分が第3号住居跡埋土中の出土となっている。以上の遺物出土状態からみると、CB-10グリッド

付近に包含層が存在した可能性が指摘できる。いずれにしても遺物は調査区西側に偏在している。

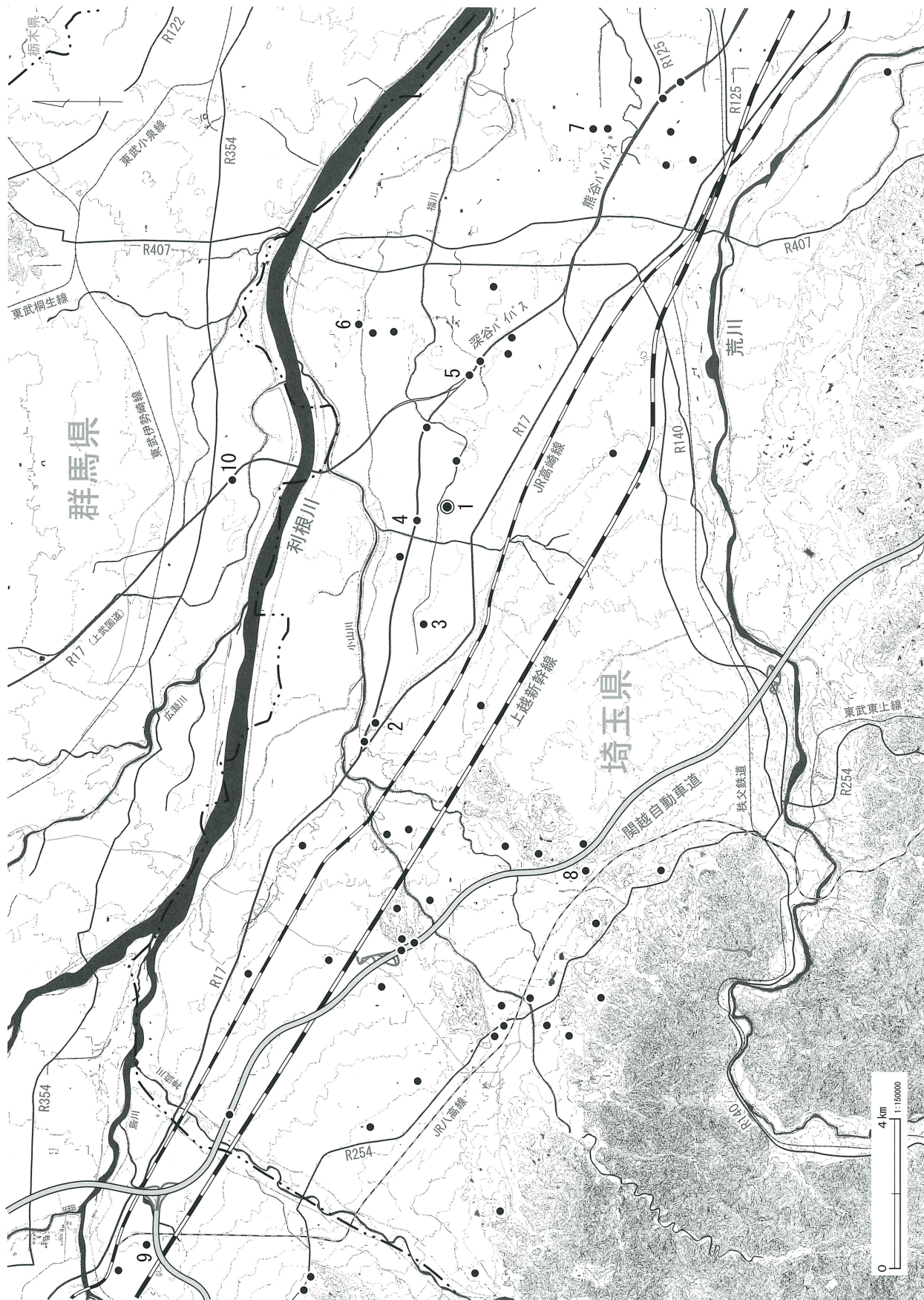
グリッド出土のためか器種組成を把握できるほどではないが、甕形土器は有文甕と外面縄文施文、無文のものがあり、粗製の深鉢が加わる。浅鉢、小型深鉢、その他の甕類、壺類は出土していない。口縁部隆帯のある粗製深鉢は、通常縄文晩期から組成化しており上敷免遺跡で多量に出土している。

有文甕は条痕地に変形工字文系の沈線文を施すもの(第20図1)と、同心円文乃至渦巻文を施すもの(同図3)がある。前者は、交点付近を見ると沈線が直線的ではなく、挟り込みの残存のためかやや湾曲気味となっている。後述する北島例に似た現象を想定できるかもしれない。沖Ⅱ、殿内遺跡にやや近い例がある。沈線は複線化し、施文幅がやや狭く、文様意匠内部を縦区画している。後者は弧線の屈曲が強く、末端の開閉状態から渦巻状になると考えられる。これらの特徴をもつ土器は、概ね四十坂遺跡に併行する段階と考えておきたい。

旧岡部町四十坂遺跡(2)は当該期の遺跡として著名であるが、同様の縦区画菱形文の甕形土器が出土している(栗原1960)。グリッド出土資料には複線化したものが認められる(鳥羽2003)。

またグリッド出土遺物には、弧線状ないし渦巻状の沈線を施した破片も出土している。類例は少なく群馬県沖Ⅱ遺跡(9)で、包含層出土の条痕壺の口縁部内面の他数点出土している。下鎌田遺跡では1245号土坑から出土している。大地系の文様意匠と考えられ本遺跡例もその系譜に連なるものと考えられる。

四十坂遺跡出土資料については、鈴木正博氏が2段階に細分して四十坂1式、2式を提唱し、群馬県前畑遺跡例を介在して氏の既に提唱した岩櫃山1式、2式に繋げている(鈴木2003)。2式とさ



第21図 弥生時代遺跡分布図

れた土器群が含まれる1号再葬墓出土土器中には、文様意匠間を縦区画された菱形文乃至三角連携文があり、文様施文領域はやや狭くなっている。

本遺跡の北方には、遠賀川式土器片が出土したことで著名な上敷免遺跡(4)があり、さらに下流の熊谷市横間栗遺跡(5)では1号再葬墓で、壺形土器と甕形土器が出土している。壺は口縁部凸帯が3段に多段化した条痕壺で、やや肩部が張る長胴形となる。甕は口縁部無文帯のもので、境界部分に段ないし沈線が認められない。群馬県沖Ⅱ遺跡に対比されている(鈴木1999)。星川水系ではあるが、北島遺跡14地点(7)の調査でも前期末から中期初頭の土器群が出土している。口縁部縄文帯と肩部に三角連携文に縦区画が加わる甕形土器で沈線は複線となっている。その他、条痕のみ、縄文施文のもの等が検出された。また「中期の頭」とされる波状文プラス横位直線文の文様帯を持つ「条痕壺」が出土していることから、三角連携文甕の所属時期について、前期と中期の界線について一定の留保がなされた(書上1999)。沖Ⅱ遺跡段階で三角連携文の複線化は認められており、菱形文等においても同様と見られるかどうか今後検討が必要となる。福川流域では、本遺跡のほかに堀東遺跡(3)があり、第11区遺構外で口縁部無文帯をもち頸部に複線化した菱形文?が施された甕形土器が出土した。明らかに後出的で縦区画文の存在は不明瞭となっている。その他縄文帯を持つものや、口縁部無文帯の条痕甕等が出土した(石坂2000)。旧妻沼町飯塚北遺跡(6)は中期前半であるが、地文縄文で三角連携文の施文が口縁部に移行したものとなっている。

妻沼低地から熊谷新扇状地にかけては、中期まで含めると第21図に示したように、多くの遺跡が

存在している。一方弥生後期の遺跡は、上敷免、明戸東遺跡があるがそれ程遺跡数は多くはない。中期中葉を中心とする遺跡は、上敷免遺跡をはじめ比較的多数知られている。利根川を挟んだ群馬県側にも阿久津宮内遺跡(10)があり、今後利根川対岸も含めて遺跡分布を考えなければならないだろう。星川水系の北島遺跡では、前述の北島遺跡14地点以外でも中期前半から後半及び、後期までの多数の遺構、遺物が検出された。同遺跡周辺部には、池上遺跡、池上西遺跡、小敷田遺跡をはじめ古宮遺跡、諏訪木遺跡、前中西遺跡、平戸遺跡等が集中しており、深谷市周辺とは異なる中期の一拠点と考えられる。

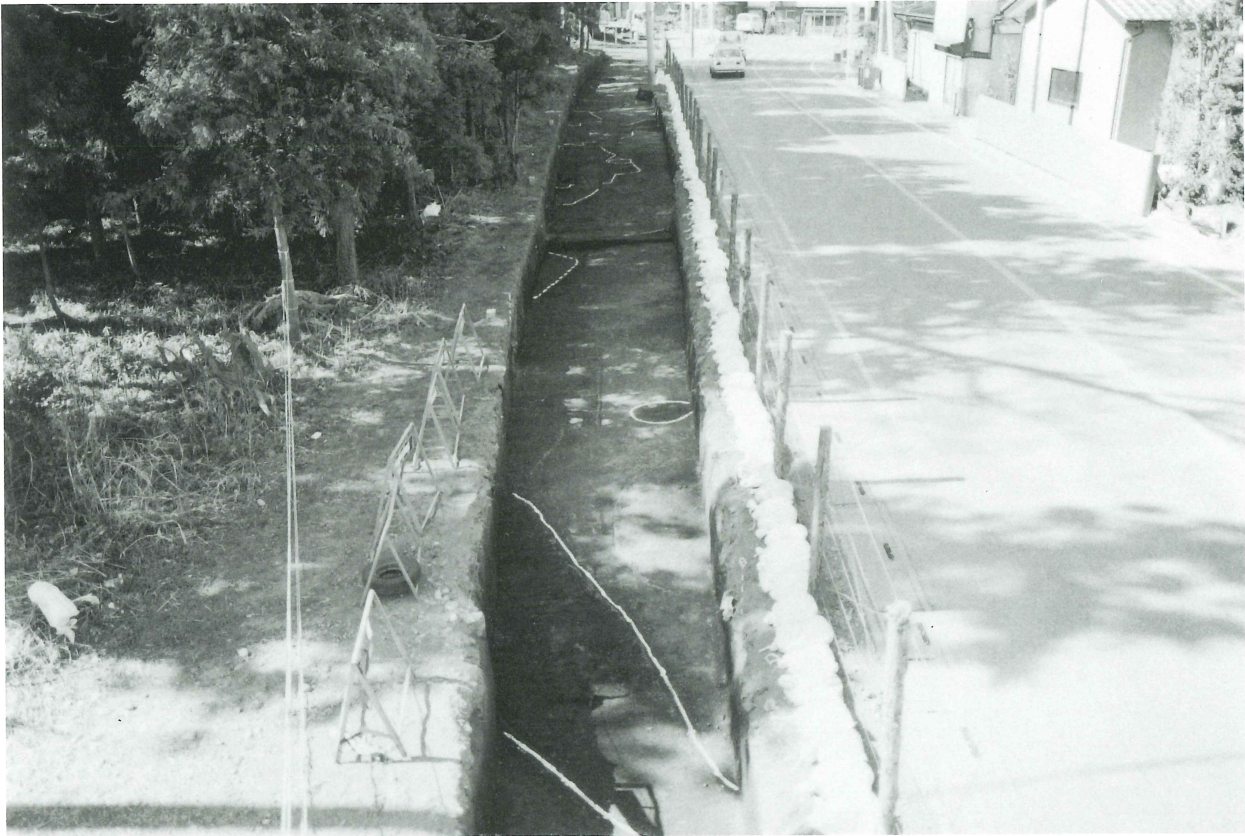
また同図では本庄台地から松久丘陵、櫛挽台地の一部にも分布が認められる。前期末から中期初頭に限ると如来堂C遺跡(8)や阿久原平遺跡、やや新しい前組羽根倉遺跡など丘陵部に比較的集中する傾向がみられる。神流川を挟んだ対岸群馬県藤岡市には多数の土坑と溝跡、包含層が調査された沖Ⅱ遺跡をはじめ、白石大御堂遺跡、山間遺跡、藤岡北山遺跡、森泉遺跡など比較的多くの該当期の遺跡が知られており、両岸を含めて一体のものと考えられる。これら遺跡群は、所謂「甘楽の谷」に続いており、この谷に沿って比較的多くの前期から中期初頭の遺跡が調査されている。前述の下仁田町下鎌田遺跡や杣瀬Ⅲ遺跡の他、内匠日影周地遺跡、下高瀬寺山遺跡などである。また安中市周辺でも注連引原Ⅰ、Ⅱ遺跡などが調査され、群馬県西部の山間部を中心に当該期の遺跡分布が認められている。したがって今後妻沼低地を中心とした交通諸関係をさらに解明してゆくためには、群馬県西部地域との関係をさらに検討していく必要がある。

引用・参考文献

引用・参考文献

- 青木克尚 1995「社前遺跡」『深谷市内遺跡Ⅶ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第46集
- 青木克尚 1996「社前遺跡（第2次）」『深谷市内遺跡Ⅷ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第50集
- 青木克尚 2000『根岸遺跡（第3次・第4次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第61集
- 青木克尚 2004『下郷遺跡Ⅱ』埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第72集
- 青木克尚・永井智教 2006『幡羅遺跡Ⅰ 正倉跡の調査（1）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第75集
- 石坂俊郎 2000『堀東／城西Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第257集
- 磯崎 一 1989『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集
- 大矢雅彦 1996『荒川流域地形分類図 その1』建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所
- 大屋道則 1994『清水上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集
- 書上元博 1999『北島遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第195集
- 栗原文蔵 1960「四十坂遺跡の初期弥生式土器」『上代文化』第30輯
- 木戸春夫 1995『根絡・横間栗・関下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集
- 木戸春夫 2000『上敷免北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第248集
- 古池晋禄 1994『上敷免森下遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第39集
- 古池晋禄・青木克尚 1997『深谷市内遺跡Ⅸ 上敷免遺跡（第8次）上敷免北遺跡（第4次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第53集
- 古池晋禄 1998『疋鼻和城跡（第4次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第59集
- 埼玉県 1987『新編 埼玉県史 通史編1 原始・古代』
- 埼玉県 1988『新編 埼玉県史 通史編2 中世』
- 澤出晃越 1988『東方城跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
- 澤出晃越 1990『上敷免遺跡（第3次～第6次）上敷免北遺跡（第3次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
- 鈴木俊昭 1999『横間栗遺跡』熊谷市教育委員会
- 鈴木正博 2003「脱条痕文縁辺文化研究所説一弥生式「Zigzag文様帯系土器群」と「脱条痕文」に観る相互作用と「共同の母体」観」『婆良岐考古』第25号
- 瀧瀬芳之 1990『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集
- 瀧瀬芳之他 1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 田中広明 1992『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 知久裕昭 1999『小台遺跡（第7次調査）』埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第60集
- 知久裕昭 2000『宮ヶ谷戸遺跡（第3次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第63集
- 知久裕昭 2001『根岸遺跡（第5次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第65集
- 知久裕昭 2003『八日市遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第68集
- 知久裕昭 2007『幡羅遺跡Ⅱ 正倉跡の調査（2）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第88集
- 鳥羽政之 2003『四十坂遺跡』岡部町遺跡調査会 第11集
- 中山浩彦 1995『宮ヶ谷戸／根岸／八日市／城西』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第172集
- 蛭間真一・坂東隆秀 1978『上敷免遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 深谷史編纂会 1980『深谷市史 追補篇』
- 深谷市教育委員会 1981『目で見る深谷の歴史』
- 平凡社『埼玉県の地名 日本歴史地名大系11』
- 吉野健・松田哲 2000『西別府祭祀遺跡』平成11年度埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書

写真図版



1 調査区全景 (遺構確認状況)



2 調査区全景 (完掘状況)

図版 2



1 第1号住居跡遺物出土状況



2 第2号住居跡完掘状況



1 第3号住居跡遺物出土状況



2 第5号住居跡完掘状況

図版 4



1 第3～7号住居跡完掘状況



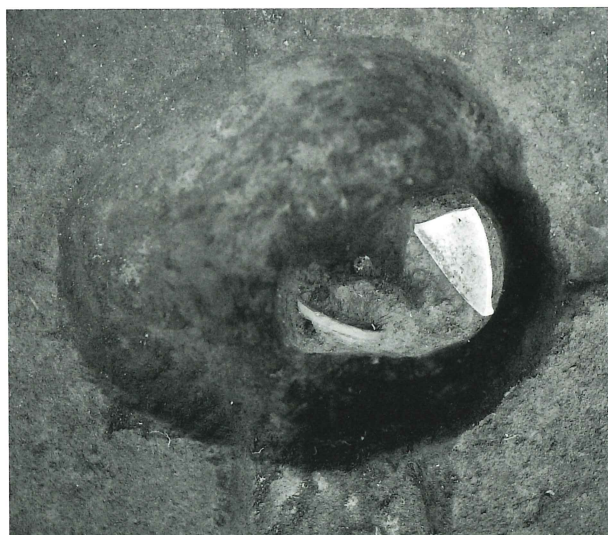
2 第3～7号住居跡掘り方



1 第1号住居跡カマド遺物出土状況



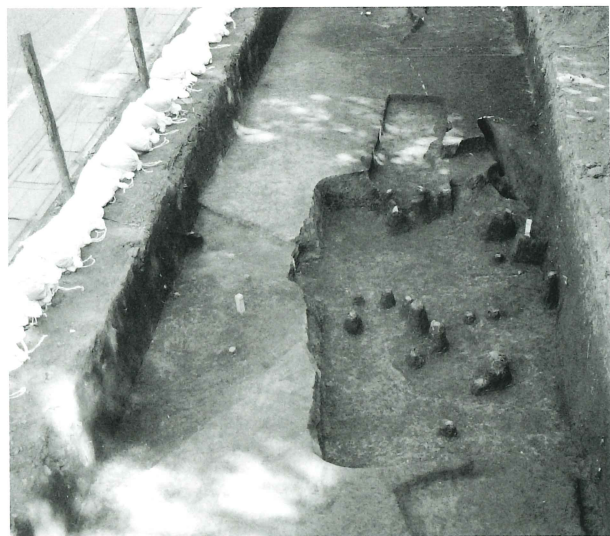
4 第3号住居跡カマド遺物出土状況



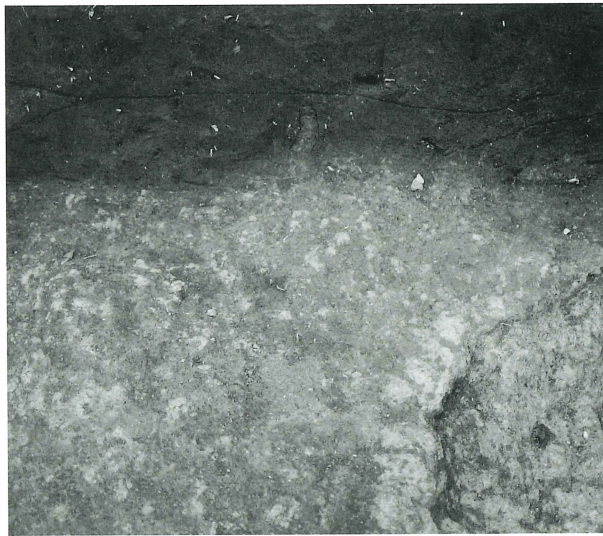
2 第1号住居跡ピット遺物出土状況



5 第3号住居跡カマド完掘状況



3 第3～7号住居跡遺物出土状況



6 第6号住居跡カマド検出状況

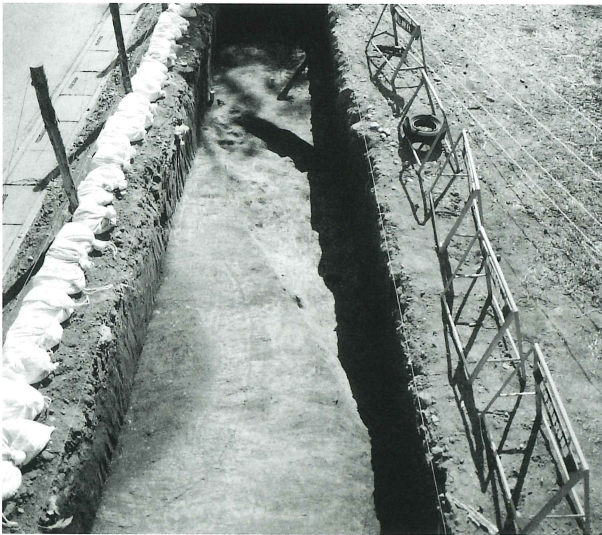
図版 6



1 第6号住居跡カマド完掘状況



4 第2号土壌完掘状況



2 第1号溝跡完掘状況



5 第3号土壌完掘状況



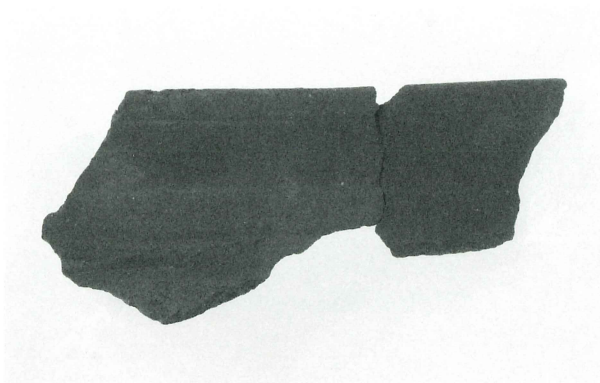
3 第1号土壌完掘状況



6 基本土層 (第4図)



1 第1号住居跡出土遺物 (第7图1)



5 第1号住居跡出土遺物 (第7图5)



2 第1号住居跡出土遺物 (第7图2)



6 第3号住居跡出土遺物 (第11图3)



3 第1号住居跡出土遺物 (第7图3)



7 第3号住居跡出土遺物 (第11图4)



4 第1号住居跡出土遺物 (第7图4)



8 第3号住居跡出土遺物 (第11图7)

図版 8



1 第3号住居跡出土遺物 (第11図9)



4 第11号土壙出土遺物 (第19図3)



2 坏底部の墨書 (第11図9・赤外線撮影)



5 第11号土壙出土遺物 (第19図4)



3 第6号住居跡出土遺物 (第13図1)



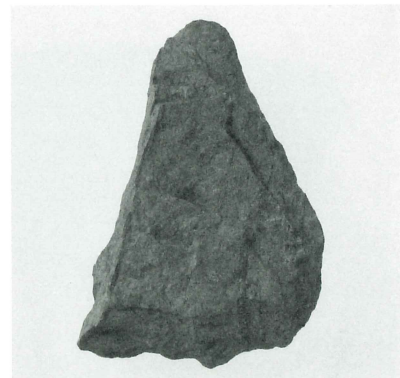
6 第5号ピット出土遺物 (第19図5)



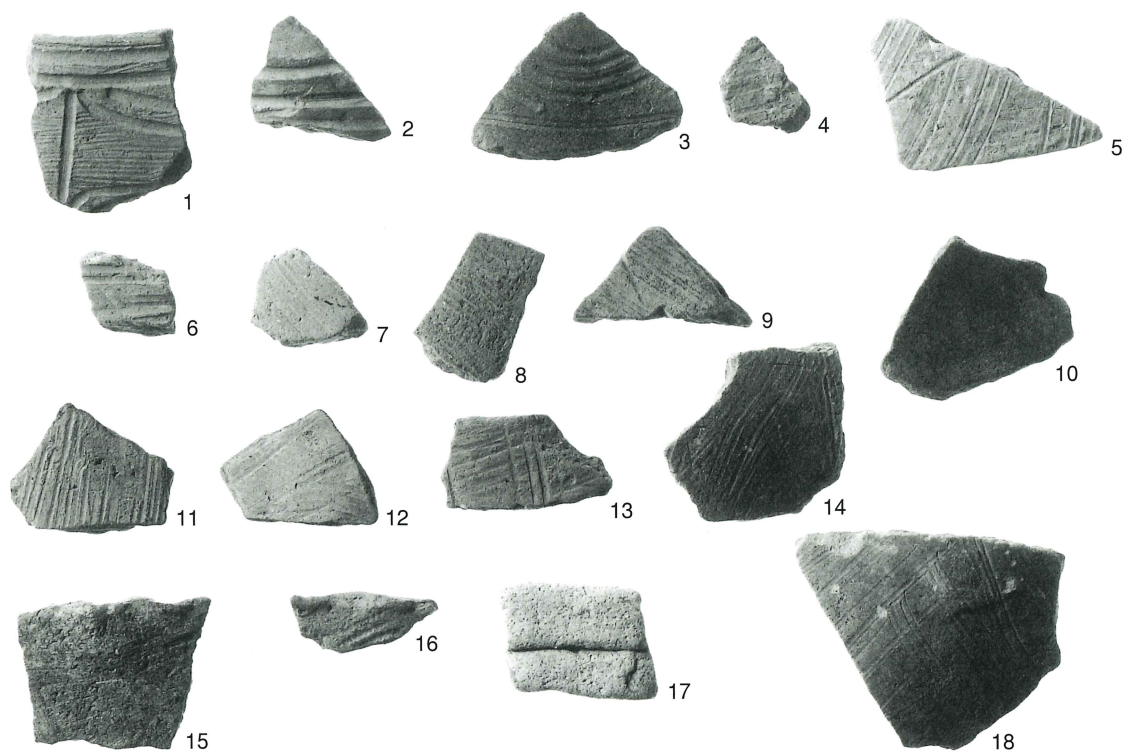
7 グリッド出土遺物 (第20図32)



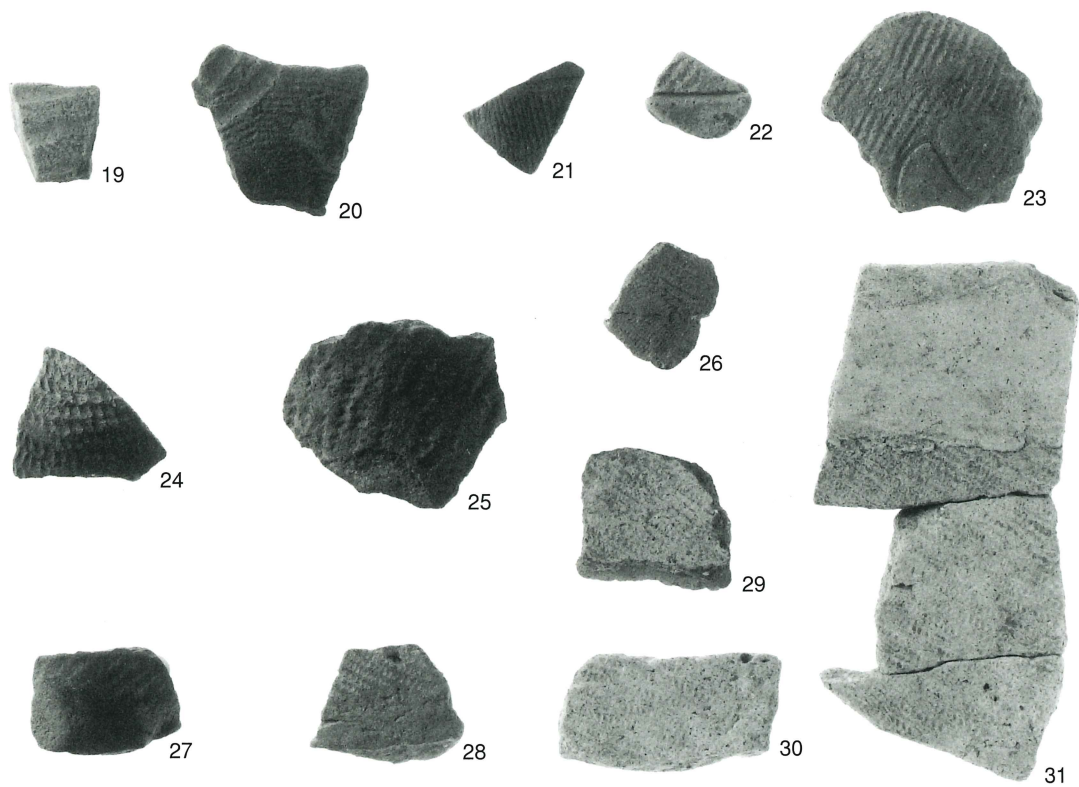
8 グリッド出土遺物 (第20図32・底面)



9 グリッド出土遺物 (第20図33)



1 グリッド出土遺物 (第20図1~18)



2 グリッド出土遺物 (第20図19~31)

報告書抄録

ふりがな	やしろまえ／ようかいちに							
書名	社前／八日市Ⅱ							
副書名	自転車歩行者道整備工事（県道深谷妻沼線）関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第345集							
編著者名	宮井 英一							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2007(平成19)年9月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
やしろまえいせき 社前遺跡	さいたまけんふかやし 埼玉県深谷市 はらごう 原郷336-1他	11218	014	36° 12′ 16″	139° 17′ 56″	20020301 } 20020329	230	道路建設
		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡 7軒		土師器・須恵器			
		不明 (奈良・平安?)	溝跡	1条	なし			
		土壇	7基	土師器				
ようかいちいせき 八日市遺跡	さいたまけんふかやし 埼玉県深谷市 はらごう 原郷337-1他	11218	259	36° 12′ 17″	139° 17′ 55″	20020301 } 20020314	270	道路建設
		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
集落跡	不明	土壇	4基	土師器				
	(奈良・平安?)	ピット	15基	土師器				
要約	<p>社前・八日市の両遺跡は、JR高崎線深谷駅の北東約2kmに所在し、福川の南側に広がる櫛挽台地の北縁に位置する。調査地点の標高は約34mである。</p> <p>発掘調査は、県道深谷妻沼線の拡幅工事に伴うもので、幅4m前後、総面積500m²という細長い範囲ながら竪穴住居跡7軒のほか、溝1条・土壇11基・ピット15基を検出した。竪穴住居跡は、出土遺物から概ね8世紀後半～9世紀に比定されるが、その他の遺構は出土遺物が少なく時代を特定できないものが多かった。なお、遺構は検出できなかったが、弥生時代中期初頭の資料が出土しており、上敷免遺跡・四十坂遺跡などの関連も注目される。</p>							

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第345集

社前／八日市Ⅱ

自転車歩行者道整備工事（県道深谷妻沼線）
関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成19年9月15日 印刷

平成19年9月30日 刊行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1
0493(39)3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／株式会社太陽美術